

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年十二月廿日印刷納本 昭和十三年一月一日發行

第四卷 第一號

土 淨

一
月
號



法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十三錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。
読んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇



大日本印刷株式會社

本社營業所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 電話牛込 (34) 代表一五一〇番

履町營業所 東京市牛込區履町七番地 電話牛込 (34) 代表二四四〇番

銀座活字
販賣店 東京市京橋區銀座七丁目四番地 電話銀座 (57) 代表〇〇七四番

大阪出張所 大阪 市北區西堀川町三四

神戸代理店 神戸 市神戶區榮町四丁目三六

滿洲國代理店 奉天 市鐵西區中央通二二



◇ 浄土 第四卷 第一號 一月號 目次 ◇

表紙・扉紙……………鈴木金平

新春講話 念佛正義……………大島徹水(二)

說苑 佛教に依る民族の覺醒力……………中村辨康(四)

隨筆 寒椿咲けり……………吉田絃二郎(六)

皇軍慰問の 戰線を巡りて……………西岡竹次郎(八)

鐵仰運動ニユース……………(英)

支那蠶女物語……………達崎龍一(三)

銃後話 珠數草の實……………飯田光明(三)

逸話 蓮生藤枝の宿……………代田重雄(四)

現地報告 戰線で會つた從軍僧……………北林透馬(二)



信仰 隨筆 佛を焚く……………佐藤賢順・(四)

正月の酒と 土佐料理の話……………田中貢太郎・(七)

信仰 隨想 富士と蜜柑……………中野尅子・(四)

隨想 友に答へて 佐藤春夫……………(四)

北から南へ 支那無錢縱走舊記……………柴田玄鳳・(五)

歌壇……………與謝野晶子選・(三)

俳壇……………太田耳動子選・(五)

國難に殉ずる大犠牲者……………桑原隨旭・(六)

徳川家康の軍旗……………大野法道・(六)

勤王僧秘話……………惠谷隆戒・(六)

編輯 後記……………(六)

改増
訂
版補

信仰讀本

錢三十二 價定 頁〇八版六四 著康辨村中
共料送 付名假りふ總

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を打開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 七〇頁 送料共
法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その翳々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

◆ 會仰鑽人上然法 所行發 ◆

淨土

一月號

千とせふる

小松のもとを

すみかにて

無量壽佛の

むかへをぞまつ

法然上人御歌





念 佛 正 義

増上寺法主

大 島 徹 水

國技館の人氣力士島田川が名譽の應召兵になつて私のところへ挨拶に立寄つたときのこと。はちきれるやうな元氣で、勇み立つてゐた。私は角力をあまり見たことがないのだが、この力士とは私が増上寺にはじめて來たところ、親の墓石の銘を書くことを依頼された因縁で懇意になつてゐた。島田川は氣性の面白い力士だ。そのときもいろいろ饒舌つて行つた。戦地にあつて自分の得意とするところは力仕事だ、五人力は大丈夫などと云つてゐた。そして御前様の字を腹巻に記して欲しいと云ふ。私は「正義」の二字を書いた。

「角力で勝負を争ふ場合、たゞ勝ちさへすればいいと云つて卑怯な真似が許されるであらうか。たゞ強ければ何をやつてもいいだらうか。私達はまづ正義の念を身につけなければならぬ。今度の事變は相手を打負かすことに目的があるのではない、東洋平和の建設といふ正義の念が根本に横はつてゐるのである。この正義の念のあるところ、盡忠報國の實が結ぶ。さうしてそれには信仰生活の大切なことを忘れてはならぬ。生きては立派に軍人としての本分を完うし、死しては佛の慈愛に抱かれる信念が大切である。くれぐれも念佛を申すことを忘れてはならぬ。」



私はかう語つて、彼を見送つた

☆

歴史を振返つてみると後世に名を留めてゐるやうな武將には眞の信仰者が多いと思ふ。徳川家康がさうだ。家康の在世中は時代が時代だつただけに數限りない戦火をくぐつてゐる。初陣は十七歳。家康について面白いのは、彼も最初の頃は武勇を轟かすための戦ひ、武士の本望たる祖先の名を擧げるための戦ひにのみ終始してゐたのであつたが、桶狭間の役がすんだ後に岡崎大樹寺の登壇上人に説伏されて、今までの考へ方をすつかり改へてしまつたことである。この時を境として史上に残る大家康が誕生したのである。何のために戦ふか、との登壇上人の問ひに對し、家康はあれこれとさまざまの答へをする。上人は家康の巧みな答への何れにも肯かない。たうとう家康は困憊する。上人は最後にたゞ一言、

「よろしく菩薩の大慈悲のために戦へ。」と云はれた。

「厭離穢土欣求淨土」の大旗を先頭に出陣する家康がこの時から見られる。同時に生死を佛に任かせた大安心の武將の面目が輝きはじめた。

☆

年頭に際して、私は益々信仰生活の重大さを思ふ。念佛を申す生活を、世のすべての人々にすゝめたい。



佛教に依る民族の覺醒力

中村 辨 康

日本民族に依つて發展し
維持された佛教

佛教はもと印度に發生したけれども、印度に於ては本當の發達を見ずして、其中心は支那へ移動した。然し支那に於てもまた本當の發達を遂げ得ず、終に我が日本に東漸して來て初めて花を咲き實を結んだのである。印度に於てはかの阿育王朝時代の如き殆んど國教的地位に置かれてその隆昌を見んとしたけれども、これもやがて政治的な權謀術策に依て壞滅され、漸くセイロンに残骸を止めただけであり、支那に於ては謂ゆる三武の排佛などで伸びんとしても伸び得なかつたのは、政治的權力などの關係はあるにしても畢竟民衆の支持がなかつたのに原因して居るからでは

なからうかと思ふのである。此點に關係したことで三木清氏は次ぎのやうなことを云つて居る。即ち「支那と印度とは風土が違ひ民族が違ひ、其文化は夫々獨立に發達した夫々獨立の性質を具へて居る。夫は二つの地域を隔離する山地と高原と並びに其處に居住する種々の未開民族とが兩者の交通を困難にしたのと、支那も印度も夫々廣大にして豐沃なる平野を有する農業國であり、何れも自己の世界において自己の生活を営むことが出來、互に他に依頼する必要がなかつたとの故である。或時代から後には兩者の間に微かなつながりが生じ、佛教の如きは勿論印度から支那へ傳へられたものであるが、印度の方では支那から何物をも受け入れて居ないことが注意されねばならぬ。佛教は信仰としても學問としても傳へられ、其儀禮や僧團の規律

や組織なども學ばれたが、然し支那に入つたのは佛教に限られ、印度の民族的宗教として重要なプラマ教或は印度教は傳へられず、唯だ其内佛教化されて佛教の中に攝取された部分のみが佛教として傳へられたに過ぎない。その佛教の與へた感化も局限されて居て、民衆の生活に對する影響は微弱であり、また佛教が入つて來た爲に支那における道德や政治に關する思想が變化したやうな事はない（中央公論十一月號）之は確かに正しい見方であるが、然し佛教が印度や支那に於て民衆の間に消化されず唯だ日本に於てのみ民衆化したことは、聖德太子が我國を「大乘相應の地」とお考へになつたやうに、我國の民衆のみが程度の高い佛教理論を受け入れ得る素質を持つて居るからであつて、支那が印度から「文化」として輸入するには輸入を必要とする支那以上の文化が佛教以外にはなかつたことを證明すると共に、その佛教が餘りにも精神文化として高等であつて、一部のインテリ以外には到底理解し得られず、無論咀嚼し得られなかつたのであり、隨つて佛教を咀嚼し得る民族は我が日本民族より外にはなかつたことを意味するものではなからうか。

現にセイロンやシヤムやビルマや支那などに残つて居る佛教は、佛教の本質的なものではなく、單なる形式のみに過ぎないのであり、且つ多少の理論はあつても之れは小乗教的な

個人主義的傾向のものばかりなのであるのを見ても想像が出来るのである。

また三木氏はこの論文に「支那から移植されたものは、時を経るに従つて日本人の生活に適合するやうに變化され、貴族階級に於て日本化されたものが、次第に民衆の間に擴がつて行くと共に一層日本化されて、最早其淵源が支那にあるとすら明かには知られないやうになつた。そしてそれが民衆の生活として現はれて來た。かうなると支那文化の日本化は單にそれだけのことでなく、それに依て日本の文化が新らしく創造されたことを意味する。そして其處に全體としての日本の民族生活の歴史的発展がある。しかもこの歴史的発展は支那とは無關係に進行して來たのであつて、日本と支那とは夫々別の世界であつた（中略）日本の歴史の展開が日本だけで行はれた獨自のものであるとすれば、その歴史に依て養はれた日本の文化が日本獨自のものであることは云ふまでもない」と云つて「東洋の文化は統一體としては存在しない」と云ふ津田博士の説を採用して居るが、この説から類推して見ても、大乘佛教は我國に於て民衆と共に歴史的発展をなしつゝ日本の精神文化として日本的佛教として實を結んだものであることを物語つて居るものである。

我國には現に十三宗五十六派と云ふやうな數々の宗派があ

る。之は印度でも支那でもこんなに分歧して然かも民衆に維持されて居る例はない。無論それは敎理が完全に民衆に維持されて居る譯ではなく、また分派其のものがホンの末節の異りだけで分れて居るものさへもあるから、この多數の流派が直接民衆の要求に依て出来上がったものではないけれども、少くとも民衆が傳統的に之を維持しつゝあることは、日本の特色として考へて置く必要があらう。

一面に於ては島國的な狹量から小異を固執して來たとも見えるけれども、我國の民衆は現に決してそんな敎理の小異などに固執して居りはしないのである。

日本佛敎は大きく分ければ「念佛」と「題目」とであり、もう少し細くすれば、祈禱を中心として居る天台眞言、悟りを中心とする曹洞臨濟、念佛を中心とする淨土敎各派、題目を中心とする日蓮各派であるが、尙ほ精細に民衆の状態を見れば、それも色々に混線して居るのである。例へば曹洞日蓮は祈禱を多分に取り入れて居るし、念佛は色々な形で天台眞言并に禪の各派の民衆に浸潤し、理論的に云へば題目も「念佛」として「念佛」の異つた一つの形であると云ふやうに、實はさう信仰的に特別ハツキリした限界もなく、現に婦人にしろ男子にしろ、他家へ縁組すればその家の宗旨になり切つて仕舞ふのが常であるのを見ても思ひ半ばに過ぐるもの

がある。またたま／＼改宗するものがあつてもその多くは寺に對する感情とか病氣平癒祈願などの功利的な意味からとかであつて、本當に筋のたつた理論をも裏付けて居る程の信仰に依るものは極めて稀れである。

要するにかゝる多數の宗派を維持して來たのは思想的ではなくむしろ傳統を重んずる日本精神の現はれと見るべきであると考へる。

世には宗教の傳統維持に對して、それを單なる情勢として冷笑する向もないではないが、他民族はいざ知らず我國の傳統尊重には實に重大な意味があるのであつて、萬一にも我が日本精神から「傳統尊重」と云ふ一要素を取り去つてしまつたら國家的にも由々しい事にもなる。實にこの「傳統尊重」こそは國體維持の上に極めて大切なものであること、云ふまでもないのである。だから其家の宗教宗旨に關する傳統維持は單に情勢とのみ見て輕視すべきものでない事は明らかであり、むしろ進んで我が國民の宗教維持性をもつと／＼尊重し研究すべきではなからうか。

かくの如くして我國の佛敎は民衆に浸潤することに依て日本獨自のものとなつてしまつたのである。そして決して外來的のものとして考へてはならないものとなつてしまつたのである。

だから支那の佛教徒や印度ビルマの佛教僧などは、日本の佛教を以て「眞の佛教ではない」と云つて居るが、少し日本に長く滞在すると、殆んど例外なしに自分の國の佛教も「日本の佛教のやうに變化させなければならぬ」と考へ直して来るが、それは日本佛教の民衆的支持の實際とその効果とを知り得たからであらう。

また或る論者は日本の佛教を目して「元來世界的理論を持つ佛教が、日本に来てからは其特性を失なつて國家的小宗教に墮落してしまつたこと」を指摘して居るが、然し果して日本の佛教が墮落してしまつたものとして頭から斷定してよいであらうか、頗る疑問とするところである。

何故と云ふに、宗教は決して單なる理論として民衆から遊離したものであつてはならないからである。どうしても民衆と接觸し民衆に依て維持されなければ、宗教としての價值もなく効果もなく生命もない筈だからである。

だから日本佛教が日本民族の宗教として國家的色彩を多分に持つたことは、むしろ宗教としての本當の行き方であつて、佛教が印度に亡び支那に亡び乍ら、獨り我國にのみ流布された大きな原因でもある。

日本佛教の勤王護國性

日本の佛教が、聖德太子に依て國家的に採用され、僧侶は國政にも參與する程の地位を與へられた程であり、國家の手に依て盛んに支那に渡つて、大陸的文化の移入に努めたのであるから、それはまだ日本の佛教を發生せしむる爲の前奏曲に過ぎなかつたけれども、其頃からして既に多分に國家的色彩を持つて來たことは云ふまでもない。

其後平安朝に入つて天台眞言二宗が鎮護國家の意味で新都の前後に構築され、屢々宮中で御前講説も行はれ、皇室や貴族の力に依て營まれた大法會などで、民衆への接觸も僅か乍らも初められたものではあるが、それはまだ本格的なものではなかつた。然し其末期から鎌倉初期にかけての劃期的な宗教改革即ち法然上人の出現に依て初めて佛教が民衆化し、茲に日本民族と日本的佛教との密接なる提攜が本當に成立したのであり、そして新しい進路が開拓されたのである。

そしてそれをトツプとして幾つかの新興佛教が出來て來た。即ち禪宗が起り眞宗が起り日蓮宗が起り時宗が起つたのである。かくて禪宗は主として武士階級へ、淨土宗及びその他の新佛教は主として庶民階級へ働きかけ、遂に我國の全民衆はすつかり佛教そのものを意識したのであるが、それはまた平安朝までの舊佛教がそれらの新佛教を長期に亘つて迫害したので、勢ひ其壓迫に堪へかねて潜行運動として、舊佛教

が貴族を中心とするのに對して、専ら民衆の中へ突入するより外に手段がなかつたから、日本製品たる新佛教は一層民族化し平民化して行かざるを得なかつたのもあつた。

そして政權が武家の手に歸しても尙ほ、皇室に於かせられては聖德太子以來の御傳統に依らせ給ふたのか、佛教に多大の御庇護を加へさせ給うたので、我國民性と相待つて佛教も亦た勤王的護國的立場を確保しつゝ、特に御式微時代に於ては、武家政權の皇室への心づかひが薄くなつたのに反して、陰に陽に皇室の御用へ其萬分の一の忠誠をなしたのもあつた。

かくて勤王の僧尼が各宗共に輩出した所以も明らかに認識されるのであるが、其一一の例は茲にあらためて申し上げなくても充分御承知の事と推察する。

苟くも國家に隸屬し國家の恩恵に浴する國民である以上、其生死を國家の存亡と共にしない筈はない。殊に我國は神代ながらの忠誠を誓ふ國民である。だから其國民に依て維持された佛教、聖德太子に依て日本國家を益する文化として採り入れられた佛教、そして特に日本的佛教として再認識再評價された法然上人以後の佛教が、國家への忠誠を盡すことに於て人後に落ちない程に「國家的」であり「民族的」であるのはむしろ當然である。かるが故に日本佛教は世界的地位から

下落したものであるとの批評は誠に以て取るに足らない愚論と云はざるを得ないのである。

古來から我國の佛教が政治や産業や經濟や藝術や教育や戦争や外交や其他色々の部門に於て、或は助言を求められ或は指導的地位が與へられ、或は實際の折衝をなしたことは、實に枚舉に暇のない程であるが、それは宗教が國家の中に發達する上に於て、最もよいコンディションに恵まれたものであり、一面に佛教が我國にのみ繁榮した所以でもある。

だから宗教としての佛教が、その哲理が世界的文化として獨自な價值を持つて居ながら、日本に入つてからスツカリ其價值を失つて民族的宗教になつたと速断することは、むしろ宗教の本質に就て其眞實なる的を忘れて居るものと云へるのである。

そののみならず佛教は宗教としての形式を取つては居ても、この理解は實に單に宗教のみに限定されて居るものではない。經典に「資生産業是れ佛道」といふ言葉もあるやうに、佛教は凡てのものに「めざめ」を要求するもので、たとへ産業にもあれ政治にもあれ武士道にもあれ國家的精神にもあれ其他何事にあつても、其正當なる「めざめ」を要求する一種の刺戟強心劑の役割を持つもので、云はゞ一切を正しく發達せしむる爲めの指導標である。随つて他宗教と同じやうに個

人的救済主義にのみ終始するものではないのである。

大乘佛敎の常套語の如くになつて居る「淨佛國土成就衆生」と云ふ言葉の如き、現代語に翻譯すれば「國家若しくは世界をして「めざめたる國」として淨められ行き、そして一切の人類をして完全なる「めざめ人」たらしむる」ことで、人々をして正しき人たらしむることはそのまゝ、其人々の住む國家をして佛國土たらしむることを意味して居るのであるから、佛敎は宗教としてばかりでなく一切を「正しく生かす」進歩發展の最高原理である。

だから其第一條件としては「個人我」に執著することを排斥するものである。今次事變に於ける「國民精神總動員實施要項」中にも「小我を捨て、大我に就け」と云ふ一節があるが、これこそ「一致團結」「億兆一心」の指導原理であると共に、大乘佛敎の要求する「破我」精神の求むるところでもある。「破我」とは「自分に死ぬ」ことである。そこにのみ日本精神も花と咲き實を結ぶことが出来るのである。そして我が皇國の將士には長い間の佛敎的訓蒙が代々遺傳されて、佛敎を知るも知らぬも皆な悉く自分の小生命を「國家」と云ふ大生命に捧げて、此の貴き大生命の生々發展の爲めに盡くして居るのである。

之は日本に佛敎があつたから、佛敎がさうなつたと云ふの

ではなく、偶々我々の日本精神の中にある氣持と佛敎の理論とが期せずして一致したからこそ、佛敎も國家的に發展し、國民精神も一層あざやかに擴充されたのである。

一切の現象は決して單一なる状態に於てあるものではなく、相關々係に依つてのみ現はるものであるからである。だからこそ我が國の武士道に於ても佛敎精神が國民性と相まつて幾多の赤誠至烈な忠臣義士を育成し助成して來たのである。

彼の有名な楠正成と佛光禪師の如き、上杉謙信と法興和尚の如き、大石良雄と僧良海の如き其一例に過ぎないが、かうした例は今度の事變に於ても増上寺宿泊の念佛部隊とか又は鷹森部隊長の今熊谷とか、信仰的將士の武勳赫々たる話しは屢々私の耳朵を喜ばして居るのである。

また或る論者は「現在の日本佛敎は日本の民衆から既に見放されて居る」とも云つて居るが、然し形の上では地方に依つて幾分かさうした傾向もないではなからう。然しそれも歐米流の物質主義、個人主義、功利主義、權力主義の然らしめたものであつて、本質的には日本固有の精神主義が一時的現象として押へつけられ、其セキを切つて放したやうな滔々たる濁流の勢には到底抵抗し得られず、且つ佛敎それ自體が排佛毀釋の痛手を受けたから、止むを得ず暫く身をかはして居な

ければ、共に押し流されてしまはなければならなかつたので、暫く消極的態度を取らざるを得なかつたのである。

然しそれにも拘らず精神的には長い傳統と遺傳と慣習風俗と言葉に依て、佛教思想とは氣付かれずに漸次に浸潤して來たものが、國民的常識と化して居るのであつて、決して佛教は我國の民衆から見失はれては居ないのである。

しかも佛教の主張する「覺醒力」は今後の時代に於てますます必要される理由が充分にあるのであるから、追々其必要が痛感され、そしてつと佛教理論が明瞭になる時が到來するであらうと確信して居る。

それは從來の寺檀關係の上にも寺檀相互の努力に依て現はれて來るであらうし、またそれとは異つた要求に依て新らしい形に於ても必ず現はれて來るであらう。例へば此「淨土」の如きものも段々其の重要性を發揮しなければならぬ状態に置かれるであらうことが考へられるのである。

「正しい覺醒力あるもののみが最後まで榮える」

之は千古萬古變らぬ眞理であり事實である。そして今の處「正覺」を要求する佛教に依て不知不識の間に培はれて來た我が日本國民のみが、先覺者として世界に君臨し得る資格を具有して居る譯である。

印度に起り支那に傳へられそして日本に根をおろした佛教

は、印度にも維持されなかつたし支那にも維持されなかつた。そして印度が英國に亡ぼされ、支那も亦た英國と蘇聯とに亡ぼされ掛けて居る。それは達觀すれば印度民族支那民族に佛教を維持する力がなく随つて覺醒力が無くなつて居たからであると言ひ得る。

だから我國の使命として東亞の平和を確立するには、支那に覺醒力を與へ印度に覺醒力を與へなければならぬ譯である。幸に印度から支那から與へられた好因縁をたどつて、それら有色民族に覺力の理解を逆輸入して憐れむべき多數の民衆を救はなければならぬのである。

そこに日本佛教としての使命があり、責務があると痛感すると共に、佛教は決して遊離した理論としてあるのではなく、具體的には其ものの中に應用しつゝ最も正しき姿に於て正しい覺醒を促して行くものであることを知るべきである。

だから、我が日本佛教が護國のであり勤王的であることは、寧ろ、大乘佛教が我國に於て最も正しき姿を具體的に顯現して居るものと斷定してよいと思ふのである。

今後の日本佛教こそ「世界的原理」として東洋の平和に貢獻すべきものである。

覺醒し行くところ。そこにのみ眞の幸福がまぢかまへて居るからである。



寫眞説明

名にし負ふ八通嶺のトンネル近くである。世界一と稱する何とか型の大きな機關車を八輛、トンネル内にブチ込んでトンネル閉塞を金てたと言ふ、その機關車がこれである。

十月初旬から十一月中旬まで前後四十日

現地 報告
戰場であつた從軍僧

從軍作家

北 林 透 馬

間にわたつて、北支戰線に従軍し、到るところ皇軍將士の忠誠と勇敢に接し、ことごとく感激した。

何しろ、軍隊生活の経験も無く――

第一補充兵だが未教育で――無論

「戦争」の實際などは知らうわけも

なく、僅かに文學と映畫を通じての、

甚だバク然たる概念しか持ち合はさ

なかつた僕が、いきなり戰線のまつ

たどなかへ飛込んで行つたのだから、

無謀と言へば無謀にちがひなかつたらう。

天津の支那駐屯軍司令部の新聞班で、第

四三號從軍作家」と言ふ、いかめしい腕章を頂戴したが、その時、前線へ出る際の種々な注意を受け、直ぐに京漢線を石家莊に向つて南下した。

僕が石家莊に向つて第一歩を踏み出した時は、第一線は正定にあつて、石家莊はまだ陥ちてゐなかつた。

天津から豐臺までは國際列車で、そして豐臺からは軍用輸送列車に乗るわけだが、天津豐臺間にも、廊坊その他、今次事變の激戦地は色々ある。

豐臺で一泊。

此處では××部隊本部に泊めて貰つた。

この豐臺から先は、言はゞ既に第一線で、軍及び軍關係以外の者は、一步も足を踏み入れることが出来ないのだ。

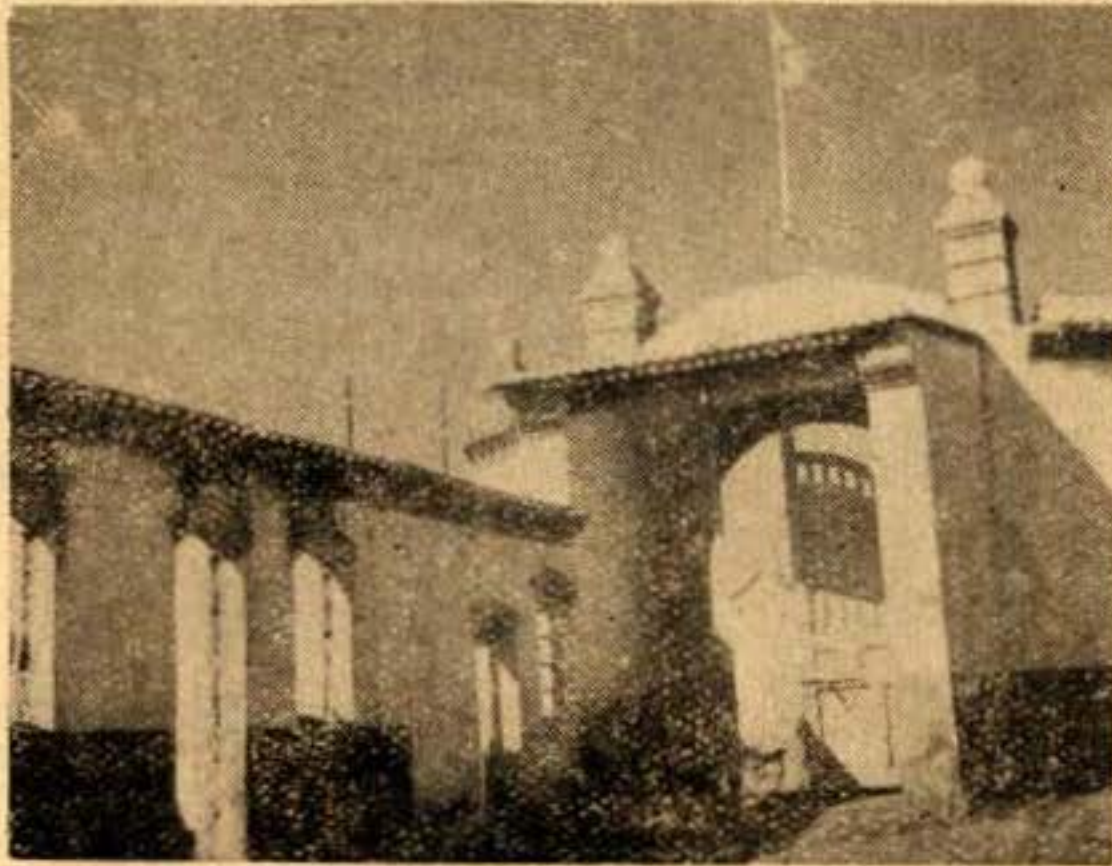
雨の全くない時季で、僕は從軍四十日の間に、たゞの一度も雨に降られなかつたし、夏が終つて、一足とびに冬に移る、そのホソの僅かの「北支の秋」にぶつかつて、氣候は實に好かつた。

と言つても、とても内地の秋のやうなわけにはいかない。

日中は非常に暑く、日が落ちると急に寒く、殊に明け方の四時頃は、内地の十二月中頃の寒さで、温度の激變ふりは想像以上だ。

軍用列車は、將士の輸送、武器彈藥の輸送、食糧の輸送等々にあたつてゐるのだが、皇軍の進撃ふりが物凄いのので、仲々輸送が間に合はず、餘裕が無いので、僕は食糧や、軍馬と一緒に、辛うじて貨車の一隅に、小さくなつて乗せて貰ふのだ。

前線の酒保へ送られるキヤラメルの箱の上などに載つてゐる時は、小々腰ツ骨の痛いを我慢すれば、よしんば箱の上から落



寫眞説明——通州特務機關。この背後に保安隊の兵舎があつたのだ。保安隊は先づこの特務機關を襲ひ、この一室で甲斐少佐は壯烈な死を遂げられた。根は深し通州城！

ちたつて、たいした事は無いけれど、馬と一緒に乗つたりする時は、あまりさう言ふ

場所に慣れないので、少々居心地が悪い。が併し、生命を捨て、戦つてゐる皇軍將士の事を考へれば、そんなゼイタクを言つてゐられるわけのものでも無し、危険な敗殘共の散らばつてゐる中を、歩いて行くことを考へれば、たとへ馬に小便を引ツかけられたツて、文句など言へるものではない。

戦線は、ほゞ鐵道を中心に、どん／＼南に向つて進展してゐるが、何しろあの廣大な北支の平野の事だから、追ひ散らされた敗殘兵は、東西南北、何處へ逃げるか解つたものではない。

鐵道沿線の左右五〇〇メートルは、附近の農民に命じて、全部コリヤンを刈り取らしたので、敗殘兵の逃げかくれる餘地は無いわけだが、五〇〇メートルの向ふには、どんな奴が何處にひそんでゐるか、全く解らない。

前線が進撃して行つたあとの、この鐵道

沿線守備に任じてゐる兵士たちの苦勞も、決して最前線に劣るものではない。

豐臺を出て暫く行くと、左手に蘆溝橋が見える。

マルコポーロ

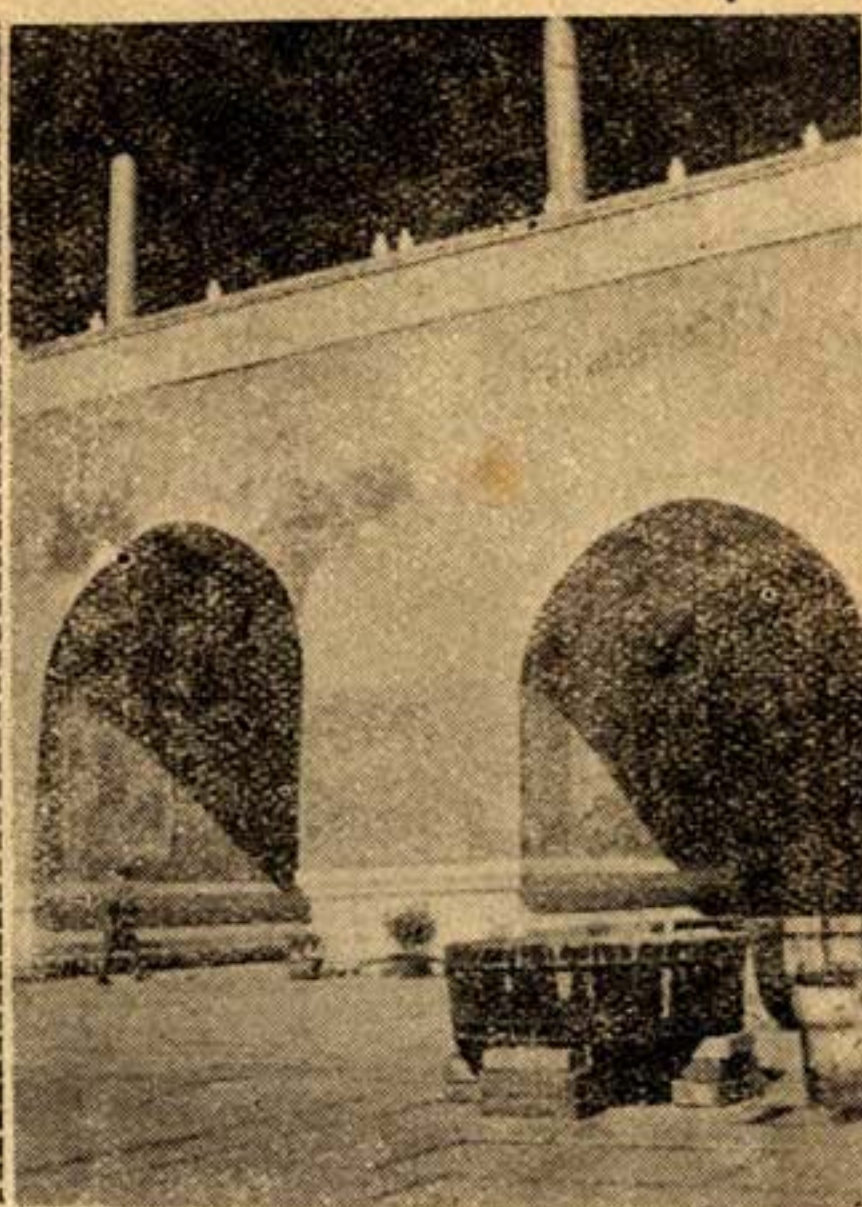
橋の名で呼ばれ、世界で一番美しい橋、として有名だつたが、今度は日支事變の發生地として、更に別な意味で有名になつた。

蘆溝橋を過ぎると直ぐに宛平城が見える。

永定河の流。

良郷の激戰の跡。

涿州を中心として、この附近は、京漢線の大激戰地で、タンネンベルグ大會戰にも



寫眞説明——北京の街は全く何事も無かつたやうに平和に靜まり返つてゐる。紫禁城を、平和な顔をして皇軍將士が見物してゐる。

比すべき、近代戰史上の激戰ださうだが、僕等が通過する頃は、秋色いよく濃く、農民はまるで何事もなかつたやうな平和な顔つきで、一心に耕作に従事してゐた。

涿州から

松林店、高

碑店、定興。

この定興

で、車中で

一泊。

翌日更に

南下して保

定で一泊。

保定は河

北省の省政

府があつたり、師團があつたり、人口も三

十萬ほどある大きな街だが、僕等が着いた

頃は、敵兵が敗走した直後で、まだゴタゴ

タしてゐた。

僕はこの保定で「從軍僧」の一人に會つ

たのだ。

從軍僧のことは、あまり新聞などにも報道されないもので、一般には知れわたつてゐないやうだが、今度の事變には相當活躍してゐるらしい。

豐臺で泊つた時も、僕等の前の部屋に從軍僧の人が一人ゐたらしいのだが、その人はカーキ色の服を着、僕等と同じ戰鬪帽をかぶり、あまり眼ださない服裝をしてゐたので、氣がつかかなかつたのだが、保定で會つた人は、ちゃんと墨染の衣を着てゐた。

向ふから

「御苦勞さま」

と丁寧な頭を下げたので、僕もあわてゝ

「御苦勞さま」

と挨拶した。

戰線では、兵隊さんも從軍記者も、出會へば必ず「御苦勞さま」と挨拶する。

墨染の衣を着てゐるので、直ぐに坊さんと解つたから

「大變ですね。どちらからおいでになりました」

と訊ねると、

「私ですか？ 大連から来ました。七月廿九日に天津襲撃事件が起ると、直ぐに此方へ参りました。」

と言ふ答へだつた。

「ぢやア殆んど最初からですね。もう三ヶ月も戦線に居るわけですか？」

「さうです。」

そして僕は、その人から「從軍僧」に就いて、二三の話を訊く事が出来たのだ。

日露戦争の時も、坊さんで從軍した人もあり、満洲事變の時にも、戦線へ出た坊さんもあるけれど「從軍僧」として、軍の統制の下に正式に從軍することになつたのは、今度の日支事變が最初だ、と言ふこと。

現在、北支の戦線には、百五十人ぐらゐの從軍僧が居り、一人戦死した坊さんもある、と言ふこと。

其處で僕は、甚だ不躰けだとは思つたが「いつたい從軍僧と言ふのは、何をするんですか。戦死者に引導でもわたすんですか。」



寫眞説明——長城の城壁上で晝食を喰べてゐる僧軍兵士。僕が此處へ行つたのは十月の終りだつたが、晝は上衣を脱ぐほど暑く、夜はたちまち零下二、三度に下る寒さで氣候の激變よりは想像以上であつた。

か。」
と訊ねると

「それもありますが、おもに戦勝祈願ですね。突撃の前に、一心に祈念するのです。」と答へた。

たゞ單に、坊さんは死んだ人間の世話ばかり焼いてゐるものゝやうに考へてゐた僕は、その答へを聞いて、甚だ意外にも思つた。

その坊さんは、所屬してゐた部隊が、京漢線を引上げて、また新しい方面の第一線に向ふので、これから豊臺まで引返す途中だと言ふことだつたが、墨染の衣はすつかり色あせて、胸につけた「從軍僧」の標示も、支那駐屯軍司令部と言ふ朱印も、まるつきり消えてしまつてゐた。「兵隊さんと一緒に、泥のなかや水のなかへもぐるもので、こんなになつてしまひました。」

と笑つてゐたが、陽焼けのした黒々した顔には、如何にも昔の、深山を切りひらいたり、惡鬼を説服したりした、と言ふ

「高僧」のおもかけがあつた。

なるほど、坊さんと言ふものは、お寺の本堂にすまし込んで、お葬式事務員みたいな仕事ばかりしてゐる、と思つてゐた僕の考へは如何にも短見だつた。

坊さんと言ふものは、そんなものであつてはならないのだ。

何時も「眞理」の爲に戦ひ「正義」の爲に闘ふものでなければならぬのだ。

「大變ですね。併し、その衣では不便です。洋服を着てゐる従軍僧もあるやうですが、あなたは洋服を着ないのですか。」

「軍の方では、なるべく兵隊さんと同じやうな服装をしろ、と言ふのですが、私はこの衣は脱ぎたくありません。衣の功德は宏大無邊です。決して彈丸などあたりません。」

さう答へた時の顔には、如何にも自信に充ちた、強い信念の輝きがあつた。

僕はその坊さんの名前も聞かず、宗派も

戦車分捕奇談

これは西岡代議士の土産

話の一つ。上海戦線の某地點で、稲が一つばいに實つてゐる田の中を敵の戦車が三臺やつて來た。

すると、その上空で日

本の飛行機が盛んに宙返りなどをやつて見せた。戦車に乗つてゐた支

那兵は宙返りなどはあんまり見たことがないから、蓋を開けてボカンとそれを眺めてゐた。

そこを、日本の兵隊が稲の中を這寄つて、戦車に近寄るといきなり銃の臺尻で頭をぶんなぐつて、難なく三臺とも分捕つてしまつた。如何にも支那式なのんびりした兵隊



ではある。

聞かなかつたが、ひと晩いろ／＼と語り明

かし、なみ／＼ならぬ學識と高德とに、こ

とごとく打たれたのである。

翌朝、僕はその人と右と左に別れたのだ

が、別れ際に

「あなたの御武運を祈ります。」

と言つて、短い默禱をさゝげて呉れた。

僕はその晩、正定の先で敗殘兵の襲撃に

會ひ、列車からとび降りて、畑のなかにかくれたが、彈丸が頭の上をかすめて飛んでゆく時、不思議にその朝別れたあの坊さんの顔ばかりが思ひ出されてならなかつた。

無意識のうちに、何か念佛に似たものを、一心に唱へてゐたやうにも思ふ。

びつしより、身體ぢうに汗をかいてゐた

— (カメラ・北林透馬)

随筆

寒椿咲けり

吉田 絃二郎

「今日もまた終日悲しい日を送らなければならぬか。」

毎朝眠りから覺めることにわたくしは生きてゆくことの苦しさに長歎息する。

欄間の硝子に夜明け方の白い光りの漂ひはじめてゐるのを眺めては過ぎ去つた三十年の生活を思ひ、明日の日を想ふ。

何處かでしきりに鶴が鳴いてゐる。落葉し盡した櫛の梢あたりで、鴨も鳴いてゐる。隣りの部屋では置時計がカチカチと時を刻んでゐる。芝生の上では二匹の犬が小鳥を追つかけながら庭を走つてゐる。

何も彼も去年の初冬のころと同じだ。しかしわたくしは空虚な部屋の中に放り出された自分一人の姿を見出さなければならぬ。わたくしはじつと耳を傾ける。そこには誰の足音を聴くこともできない。

わたくしは起きて霜柱を踏みながら芝生に立つ。たゞ二匹の犬のみがわたくしの姿を見て跳びついて来る。

空は曇つてゐる。恰かもわたくしの心の世界のやうに。

忘れられたやうに檻の下に山茶花が二三輪霜にもめげず赤い花を開きを見せてゐる。

「もしこのまゝ、この孤獨の生活が十年、二十年つゞくとしたら。」想像するさへも恐ろしいことである。しかしそれは悲しい絶對の事實だ。わたくしに賦へられた唯一の現實だ。宿命だ。

わたくしは離房の佛間にはいつてゆく。花の水を取り替へ、香を焚き、經を誦するわたくしはかすかな光りを感じる。

生きてゐることをありがたさを感じる。

頬を傳うて流るゝ涙、それも生きてゐればこそだ。骨を削るほどの寂寞、それも生きてゐればこそだ。

わたくしは生きて、亡き人を懐ひ、飄經することのわびしさとありがたさを感じる。

昨日まではわたくしは、人生の喜びを味ふために生きてゐた。今日はわたくしは人生の悲しみを味ふために生きてゐる。昨日までのよろこびに満たされた人生を感謝する。

今日の悲しみに満たされた人生をもわたくしは感謝しよう。

夕暮の薄暗にとざされた庭の隅の緑杉の下に立つて人の影を探すこともある。

應接間のソファに腰を卸しては音待を待つこともある。二階の書齋を探し、倉の鐵臺の前を覗いて見ることもある。しかし何處にも人の影は見出されない。わたくしは永遠にたゞ一人の旅人となつてしまつた。わたくしの心は叩きのめされる。時として孤獨の悲しみに打ち敗かされてしまひさうだ。自殺をさへ想ふ。

しかしわたくしは思ふ。ほんたうに生きるといふことは、刹那刹那に生と死の二つの世界に彷徨する程の突き詰めた生活に於いてのみ實感さるゝのであらう。

死は必ず一度は来る。死を覺悟しながらも。その苦しさと寂寞の裡に突き詰めた心の世界を實感しなければならぬ。わたくしは死を凝視めつゝ一日一日生き延びて行く現在の生活を苦しくも思ひ、尊くも思ふ。

良寛和尚の手紙に、地震に人が死に、和尚自身辛うじて死を免れた折のことを書いたものがある。その手紙の中に「死ぬ時は死ぬが宜く候」といふ意味のことが書いてある。ありがたい悟りだと思ふ。現在のわたくしの苦しい心、切ない心にとつて殊に尊い教である。

死ぬといふことは一面から考へると、醫學の力、科學の力で幾分は引き留めることも出来るであらう。しかし死は終にすべての人間が背負はされた運命である。一度は死ななければならぬ。しかも死の悲しさに心を傷らうとしてゐる現在のわたくしにとりて良寛和尚の言葉はいひやうもない尊い。

不圖眺むる庭の隅に今日はじめて寒椿が咲いた。わたくしはたゞ一人でじつと見つめてゐた。去年までは嬉しい心に眺めた花であるが、今年からはたゞ悲しい思ひ出のみに眺むる花となつた。今年の冬は耐へがたい冬となつた。庭の石の寒々と氷についてゐるのも奴のやうに胸に迫る。

しかしわたくしは思ふ。生てゐるかぎりこの悲しみ、奴のやうに冷たい一切を耐へるところまで耐へて行かう。もし死が惠まるゝ日が來たら、その時こそわたくしは靜かに大往生を遂げることが出来るであらう。

一生を憤りと憎みの炎に燃やし盡したストリンデルが死の床にありて「わが胸に十字架を置いてくれ。そして寂しい山上の木の下に葬つてくれ」と言つた最期の靜かな心持ちもうなづかれる。わたくしは過去の幸福な生活を感謝する。

來るべき孤獨と寂寞の生活をも感謝する。

わたくしは今はじめて懺悔の生活のいかに苦しく、いかに尊きかを知つた。死ぬことのいかに寂しく、尊きかを知つた。

孤獨なる師走空を仰ぎつゝわたくしは庭に立ちて今日も生きてあることの寂しさと尊きをしみじみと感じる。



戦線を巡りて

上海派遣軍並
臺灣駐屯軍

慰問議員團長

西岡竹次郎

抗日の根源を見る

私が慰問議員團の一人として上海に参つてから大分日時も経過して、戦局も大いに進展し既に皇軍は南京城を既に占領しみると云ふ有様で、既に舊聞に属することもあるかと思ひますが、私が直接見聞した二三をお話して見ませう。

私共の上海に参つた時は、吳淞の沖に船が差掛りますと、濛々と煙が立昇つてゐるのが見えます。さうして砲聲が殷々として聞えて来る。吳淞から上海までは黄浦江に沿うて、軍工路と云ふ立派な道路があります。その中間に殷行鎮邊り迄は日本の兵隊が居りますが、あとの上海まではずっと支那の兵隊が居つたやうな時です。私共は吳淞の方から黄浦江を遡つて上海に行つたのであります。

が、黄浦江にはずっと日本の軍艦が並んでをつた、その中を上海に行つたのであります。

行つて先づ感じましたことは支那の兵隊が、私共の想像したよりもずっと強いと云ふことであります。どうして強いのか、その原因を簡單に申すならば、

第一には蔣介石が多年に亘つて抗日、毎日の教育を徹底的にやつてをつた。小學校の生徒はおろか、幼稚園の生徒にまで之を教へ込んでをつて、それが一種の信念となり、宗教的なものにまで進んでゐる。その一例を云ふと、或る地點を日本軍が占領した時に七歳位の子供が逃げ遅れてをつた。是は可愛い子供だと云ふので、或る將校が頭を撫で、又前進して行つた。さうすると意外なことにその小さい子供が、何處に隠してゐたのか、ピストルを出して、後ろからその將校を射たりとしたといふことです。

また或る地點では占領した跡に臨月に近い一人の女が逃げ隠れてをつた。情深い日本軍の將士は、それは可哀さうだと云ふので、いたはつて助けておいた。ところが、毎日晚になると何處からともなく狼烟を擧げて日本軍は此處にゐる、之を標準に撃てと云ふ合圖をする。其處は支那人の居るべき所ではないのに狼烟が擧つてゐるので行つて見ると、晝間助けてやつた臨月に近い女が、支那兵に向つて狼烟の信號をしてをつたのです。直ぐにその場で逮捕して處断したけれども、その位抗日教育が徹底してゐる。

また戦場にはずつと支那兵が將棋倒しに死んで寝てゐる。その死骸が皆前線で後ろ側ではない。是れは督戰隊が後ろにおつて、逃げて來れば殺すと云ふ關係もあるでせうが、皆前に云つた様な抗日の信念を植ゑつけられてそれで勇敢にやつてゐる。それが十七八歳から二十二三歳の血氣旺んな青年である。

第二の原因は、前の上海事變後から非常に準備してをつた。停戰區域内では公然とやる譯には行かないので、兵隊が百姓に化けて、道と云ふ道には全部穴を掘つて置いた。御承知の通り小さなクリークが縦横無盡にある。そのクリークの縁に悉く穴を掘つて置いて戦争になると、それが直ぐに戦場として使へるやうになつてゐた。又所謂トーチカを造つてゐる。例へば敵前上陸を最初にやつた吳淞の邊は全部穴が掘つてある。さうして船から上つて行くと、そこか

ら撃つと云ふ譯です。

第三の原因は蔣介石が、北支は失つても上海は死守しなければならぬと云ふ意味で、蔣介石直轄の中央軍の精銳を以つて護つてをつた。精銳な數は判らないが五十萬以上でせう。そして武器は最も精銳なものを持つて居る。外國製の有ゆる武器を使つてゐる。支那兵の中では兎も角上海の兵隊が最も優れた武器を使つてゐたのです。當時、海軍の陸戰隊が三臺の戦車を鹵獲して、一臺は内地に送つたさうですが、一臺は上海に置いてあつた。それを私共は見せて戴いたが、是は日本にも無いさうで、英吉利のアームストロング會社で造つた最近の優秀な戦車であると云ふ説明でした。

以上のやうなことが、上海方面に於ける支那兵が頑強に抵抗した原因です。これは日本軍でなければ、到底この支那軍を打破ることは出来なかつたらうと云ふのが、支那駐在の歐米軍事専門家の等しい意見であります。

始めの頃上海の戦況は遅々として進展しないと云ふ様な言葉を耳にしたことがあつたが、しかも日本軍は既定方針によつて行動してをつたので、結果に於いてちゃんと豫定通り進んでゐる。如何に日本軍が優秀な強い軍隊であるかと云ふことを感ぜざるを得ないのであります。

名將の下名卒あり

未曾有の戦績を納めつゝある一つの原因として私は部隊長と部下とが如何にもしつくりとした精神的結合を持つてをり、且つ凡ての人々が軍規を如何にも嚴重に守つてゐると云ふことを擧げたいと思ふのであります。

その一二の例をお話して見ますと、皆さんも新聞紙上で御承知の和知部隊長と永津部隊長——この二人は上杉謙信、武田信玄と言はれて居るさうです。軍司令部で發表の時もさう云ふ言葉を使つて居られました、和知部隊長はなぜ上杉謙信かと云ふと、敵の群がつてゐる眞つ只中に自分自ら日本刀を振り翳して飛込み、斬つて斬つて斬りまくる。新聞にある通り、一回に四十何人かを斬つたと云ふのは事實です。一回に四十何人も斬つたのですから、敵は和知部隊長と云ふ名を聞いただけで震へ上ると云ふことであります。

それから永津部隊長は武田信玄と呼ばれて居る。この人の戦術を鼠取り戦術と云ふ。これは夜襲して来る敵を、一番重要な地點を全部開けておいてまんまとおびき寄せておいて、さつと後方を閉めて袋の鼠にしてしまふ。そしてこれを殲滅すると云ふ非常に巧みな戦術を用ひてゐて有名であります。

私共のお逢ひした永津部隊長はか様に非常な戦略家であると共に

部下に對して非常に親切です。部下が斥候に行つて歸つて來ると「よくお前は無事に歸つて來た、喉を疲れたらう。まあ休んで一服吸へ」と煙草を出して自分で燐寸を擦つてやる。或ひは負傷して歸つて來ると、「よく命が助かつて來た、然し傷は痛いだらう」と云つて、繃帶をして慰めてやるといつた風でありますから、全く此人の爲には何時死んでも悔いないと云ふ話を、その部下の兵卒から聞きました。本當に名將と云ふのは斯う云ふ人だらうと思ひました。

その部隊長の様子を見ると、帽子も被つて居らなければ軍服も着て居らぬ。莫大小のシャツを着て、千人針の腹巻を巻いて、その上に眞白い胴着を着てゐる。其の胴着には前の方に「千人力」後ろに「武運長久」と書いてある。髭はぼうくと生やし、丁度蔚山の戦の時の加藤清正が斯うではなかつたかと感じました。

斯う云ふ名將とも申すべきやうな人が居ると共に、兵士の中にも名卒といつたやうな人がやはり居ります。その一例を云ふと、私共が貴腰刀に上つて馬で参ります時、道が悪い。すると吾々の先頭に立つて案内してゐる班長の伍長が「俺の足跡を傳つて來い」と命令を下す。先頭の馬の足跡を傳つて行かなければならぬ程非常に危険な道なのです。それで私共の後になり前になり、非常に注意して呉れる。其の内に喜多代義士の乗つてゐる馬が脚を怪我してしまつたそれ程道が悪いのです。どうするかと思ふと、班長は直ぐに自分の

馬を飛下りて喜多代議士に自分の馬を提供して、傷ついた馬の脚をハンカチで纏帯して馬の背負つてゐる鞍を自分が背負つて、泥濘膝を没する所を何里と歩いて行く。

それから晝頃になると、馬に先づ自分の持つてゐる堅パンを食はせる。其の内に一人の兵隊が日射病に罹つて眞青になつて倒れた。それを介抱して後の人に託すると共に、大きな聲で命令して「全員前ボタンを外せ」と云ふ。さうすると胸に空気が入つて日射病を防げるさうです。さう云ふ注意をしてをる。一伍長さんでは是れ位行届いた注意をする。そして部下を愛し又馬を非常に愛する。

さうかと思ふと儼然たる所がある。と云ふのは一番最初馬に乗らうとしても中々手に入らない。すると其處に居つた中佐の人が、部隊長でせうか、その人が「班長、お前馬を下りて提供しろ」と言つた。すると「左様でござりますか、私は議員各位を案内する先達であります、それには馬上でなければ職務は勤まらぬと意ひます、私は歩くことを厭ひませぬが、それでも馬を提供致しますか」と云ふ、それには一言もありません。

それから私共が慰問を終つて二日目に貴腰灘に歸つて軍艦に乗らうとする時に、丁度上海方面から重大使命を帯びて来た一人の少佐が軍艦から下りて来た。其處は誰が上陸して来ても、行く者は馬に乗るより外ない。さうすると其の少佐が班長に向つて云ふのには、

「自分は某々地盤に行くのだが、それには議員の方々が此處で馬を下りるといふことを知つて来たのだ、どうか馬を一頭貸して呉れ」と談判をした。吾々は黙つて聞いて居ると班長は斯う云ふ、「私は部隊長から議員各位を此處まで無事にお送りしろといふ任務を帯びて参りました、今其の任務を終つた所であります。部隊長は敵の彈丸が議員に當りはしなかつただらうかと言ふことを非常に心配して居るに相違ございませぬ、これから行つて私は報告をしようと思つてをります。殊に兵も馬も晝飯を食はずに今疲れてをります。お氣の毒ですがお断り致します。斯う言つてビシリ／＼理路整然としてやる、斯う云ふ伍長がありました。

斯ういふ人が本當の戦争をやるのです。斯ういふ兵隊が居るから日本軍は強いのであると、私共は一同皆感激致したのであります。斯様な人こそ名將また名卒と申しますか、斯ういふ人々によつて奮闘せられて居るのでありますから、私共の身内或は親戚の者が兵隊に行つても、本當に安心して居つて宜しい。將校は兵卒を庇ふ、そして自分が第一線に立たうとする、兵卒は自分の上官を庇ふといふ此情義の美しい所に日本の兵隊の強い所以もあるのです。全く吾々は斯ういふ人の下にならば、自分の一子でも兄弟でも託するに足ると云ふ氣持が致したのであります。

珠數草の實

飯田 明光

河野 榮弘畫

土塀には一ぱいに陽が照つてゐる。小春日和にもまがふ午さがりのことだつた。

塀に背をあてゝ子守唄を歌つてゐる加代ちゃん——年がら年中、起きるとすぐに赤ん坊をおんぶして、ひねもす、この塀のあたりで遊び暮す可哀相な加代ちゃんは、やつと七つになつたばかりである。たつた一人の兄惣平が、萬歳に送られて征つてからは、實のところ天涯の孤兒になつたやうなものだつた。

出征の日、一等兵の惣平は、男泣きに泣きながら、こんなふうな挨拶をした。

『加代はもう獨りぼつちです。私はお役に立つことを喜こんでゐますが、もう自棄くそです。この自棄くそを私は戦地までそつと持つてゆきます。だから暴れまくつて戦死します。み國のためと加代のために、私は華々しい戦死を希つてゐます。どうぞ、この加代坊を

お願いします』

一瞬間、小驛の雑沓は呼吸を殺して、慈しみの眼を惣平と小さな妹の加代ちゃんに注いだ。惣平が挨拶してゐるあひだ、加代ちゃんも惣平の側にゐて、絶えずもぢく／＼と兄の奉公袋を覗んでゐたのである。白いボブリンのセーラー服がよく身についてゐて、いちらしさが餘計人々の胸に應へた。加代ちゃんがほんたうの「子守」になつたのは、その日からだつた。

ちよつと鼻にかゝつたやうな甘つたるいこゑで、もう小一時間も子守唄はくり返されてゐる。私は出て行つて話しかけた。

『何してるの、加代ちゃん』

『珠數玉！』

『珠數玉？』

『えゝ』

『珠數玉つて何？』

『知らないの、おちさん。珠數玉の實よ』

土塀には一つぱいに陽がさしてゐた。乳母車の赤ん坊は眠つてゐる。その側で加代ちゃんは塀に凭れて、長い白糸に珠數草の實をつないでゐるのだつた。

長いあひだ忘れてゐた珠數草の實、——かつては私も、戦れにこの實を挿したことがある。何の惱みも憂もなければ、私だとして昔の

童心に歸り得ようものをと、私は私の幼い時分をなつかしくひるがへつて、その眇い記憶を呼びさまさうと焦つた。

實はもう赤茶化てゐて、擦れる度にさらさらと音をたてた。

長い葉のついた枝ぐるみの草の實を、赤い友染の前掛けに入れてゐて、加代ちゃんはせつせと糸につないでゆく。

『それ、どうするの？』

『ね、おちさん。兄さんはお地藏さんにならるのよ。兄さんがあたしにさう言はかつたのやし——』

『惣平さんが、い？』『ええ』『お地藏さんにね？』

『ええ、お地藏さんにならるの。うちは貧乏やさけい兄さんがお地藏さんになつて、たんと／＼お錢をさげて下さるの』

加代ちゃんは莞と笑つてから、

『そいでね、おちさん。この珠數玉は、お地藏さんに掛けてあげるの』とつけ足した。

出征の日、泣きながら、驛の雑沓で最後の挨拶をした一等兵、いたましくも勇壯な兵卒として描いてゐた惣平の姿を、私は一瞬にして見返さねばならなかつた。

一人になつてしまふと加代ちゃんはまた誰に聞かせるでもない子守唄を、例の甘つたるいこゑで歌ひ續けた。

風のない初冬の午さがりだつた。



小 説
蓮 生 藤 枝 の 宿

代 田 重 雄
田 村 辰 三 畫



涼しさを呼ぶ夏の雨が四五日降りつゞけて、水の威を増した大井川
磧で川越人足共が何やら喚いてゐるのは、やがて「川止め」になる沙

汰であらう。

その寸刻の危い瀬を辛うじて越えて、川役所に御符を渡すと、網代
笠の僧は「やれく」といつたかたちで、錫杖を持った白い手甲の兩
手をうしろに張つて「ウーン」と、救はれたやうにのんびりと腰を伸

ばした。

磯を越えんと、雑草の生ひ繁つた街道が行手に長くつゞいてゐる。

島田——それから藤枝までの二里八丁の道——緑の濃い瀬戸山を左に見て、面白からず、可訝しからず、彼の僧は石のやうに無口に歩きつゞけた。

だが、街道に添うた瀬戸川の咽ぶやうな川瀬の音が、シーンと静まり返つた四邊の物象の中に溶けて、その微かな餘韻が不思議なくらゐ彼の氣持を澄んだものにした。

摺り切れた錫杖のきつ先が、コツ／＼と街道の小石を鳴らした。

藤枝から一里ばかり手前を巡る頃は、街道の家々に黄昏の灯がチラチラして、やつと藤枝の驛に足を踏み入れた時には、草鞋の足許も見えないくらゐ四邊は眞つ暗だつた。

「お坊さん、お泊り下さい」

狐色に燦んだ掛行燈の淡い灯の下から、黒い犬ころのやうに轉けて來た乙女が、宿を物色してゐた彼に物馴れた口調でかう言つて、衣の袖を引いた。

「宿は何處だな？」

「すぐ其處、それ、いまお坊さんと同じやうな人の入つて行く家」

自分と同じやうな雲水らしい僧形が、乙女の指の方向でチラと彼の眼に映つた。

「坊さんが好きかな？」

「大好きです」

乙女は少しも羞かまずに應へて、黒い大きな眼でヂツと彼を見上げた。

「ハ、、、では、そなたの家で厄介にならうかな」

乙女は悦んで、綱代笠を引つたくるやうに彼の手から奪ふと、ずんずん先へ歩いて行つた。とつぷりと降りた夜の幕に紛れて、やがて彼の僧は一軒の旅籠屋の軒をくゞつた。

二

夏らしい桔梗色の空が明けて、露を含んだ涼しい朝の風が冷んやりと開け放した縁から流れ込んだ。

昨夕一夜を、この藤枝の旅宿で明かした蓮生坊は、起きぬけのぼんやりした頭を清々しい朝の風に吹かれながら、庭へ下りた。

裏庭を隔てた向ふの竹林の眼の覚めるやうな青い一むらからパツと雀が飛び出して、清冷な風が衣の中をかけ抜けた。

「お坊さん、ご飯をお召り下さい」

それは昨日の晩方の乙女であつた。乙女は縁の端にヂツと佇んで、彼に微笑を送つた。

「お坊さんが大好き——」だと言つた乙女のその言葉を思ふと、何んとかなく可憐な氣がした。乙女にさう呼ばれても、蓮生は黙つてその方を一瞥したゞけでまだ其處を去らうともしなかつた。

異郷の自然の風物を見るにつけ、懐しい故郷の空の事や、越し方の事などが想ひ出されて來た。懐しい伊豆の山々を見る日も、もう間近い。

蓮生はあまりに變り果てた己が姿を、今更のやうに心に歷々と見返した。

弓矢執つては軍門の右に出づる者なき坂東武者熊谷次郎直實、その偉丈夫こそ、今の蓮生坊の先の世の姿であつた。

源家華やかなりし頃、武勇を楯に幾多の戦場を駆けめぐつた且ての勇士も、一念發起して佛門に入つた今の姿で思へば、遠い夢の世界を見るやうであつた。

家督の事で、親族の久下直方を相手に、名利の中を韋駄天のやうに駆けめぐつてゐた自分の姿を思ふと、今更淺ましくなつた。自分の榮達と利慾の爲には、たとへそれが世の道理にはづれた曲事であつても阿修羅のやうに人を踏み躪つて行く。それが人の世のすべての相であつた。

(自分が娑婆を捨てたのも、その故ではなかつたか)

さうだ、一切を捨て、一切を忘れ、一切に超越した本來無一物となつた蓮生の心には、何物も無かつた。有るはたゞみほとけの澄んだ心のみであつた。

一所不住、天蓋無執の身は氣が安かつた。懐しい思ひ出の鎌倉を去つて、伊豆の走湯山に登つた頃は、南國らしい暖い伊豆の山村には

白い梅の花が、夢のやうに美しく咲いてゐた。

(さうして上洛する頃は、紅い桃の花が咲いてゐた)

蓮生はその頃の事を、懐しい夢の世界を追ふやうに想ひ出した。

そして忙しい旅の幾夜かを過ぎて上洛した蓮生は、黒谷の法然上人を頼り、御弟子となつて出家し、遂に蓮生法師と名を改めたのであつた。

そして幾年——今故郷武藏國熊谷の里に歸る道すがら、蓮生坊はこの藤枝の宿に草鞋をぬいだのであつた。

三

朝の食事をすませ、いくらかの拂ひをすると、蓮生の囊中は全く残り少なくなつてしまつた。金銭には冷淡であつた彼も、これから未だつゞく旅の道中、この目前に迫つた僅かの鳥目ではどうすることも出來ない。

「囊中無一文も、さて心細い限りぢや、ハ、……」

蓮生は腹ばたに引ッ付いた胴巻をさすりながら、餘色にすゝけた宿の障子に向つて、豁達な笑ひを投げつけた。

それから暫くして、蓮生は、宿の主の前に圓頂を叮嚀に下げた。

「是非一貫文だけ借用致したく、お願いに上りました」

これが且つての荒武者とは思へぬほどの、おだやかな物腰であつた。



蒼い圓頂と、柿色の衣とを等分に讀めてゐた宿の主は、

「一貫文？」

と思はずかう言つて、今度は蓮生の顔をヂツと見た。一貫文の金に驚いたのではない、蓮生の口から出た言葉が意外だったからである。

「故郷の熊谷に歸るまで、是非その金が入用につき……」

蓮生はもう一度頭を下げた。

それが普通の者だつたら主は無下に斷つたかも知れない。主は蓮生の顔をヂツと讀めてゐるうちに、何かその心の底にある尊いものに壓されて、無下に斷る氣になれなかつた。

主は昨日の黄昏の頃、蓮生が士間にしよんぼりと佇ずんだ時から普通の雲水の僧ではないと思つてゐた。眞實の佛の悟道に徹した今の蓮生の心も、姿も、聲も、それは誰もが知る凡庸なものではなかつた。

「貸しませう」

主は明るい顔できつぱりと言つた。

「お貸し下さるか」

蓮生は颯々返しに言つて、

「南無阿彌陀佛——」

嬉しさのあまり思はずかう念佛を申して合掌した。ほんとに救はれたと思ひだつた。

「ハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、」

眞實な氣持でした蓮生の仕料が何か可訝しかつたので、二人はドツと笑つた。心が一つに溶けた笑ひだつた。

「しかし、所定めぬ雲水のお前さんに……いや武藏國熊谷が故郷と言ひなすつたが……とにかくそのお前さんに、一貫文の鳥目を返済す見込みがあんなさるか？」

もつともな主の言葉とも思つた。

「長いことではありません、再度の上洛の時必ずお返済仕ります」
物分りのいゝ主に蓮生はすつかり好意がもてゝ來た。

「む、ではそれまで、何かお前さんの持つてゐるものを一品だけ、預からして貰はなければならぬ」

だが、蓮生の持つてゐるものは、柿色の衣と、黒い袈裟と、珠數とよりほか何も無かつた。錫杖に綱代笠もあつた。だがそれは一刻も離すことの出来ない、大事なもののばかりであつた。

「見らるゝ通りの雲水の僧です、別にお預り申す品として、餘分な物はありません」

まさか主も、衣や珠數を置いて行けとも言はれなかつた。

「では、十念をお預り致します」

蓮生は咄嗟に、十念の事を思ひ出した。

「十念？」

主はいぶかしさうに眉を寄せて言つた。

「十遍のお念佛を預けて行かうと思ひます」

蓮生は嚴に言つた。

「念佛？ そんなもの預つたところで、仕方がない」

「いや、これこそ拙僧の持つてゐる一番大切な物です」

主は莫迦らしいと言つた貌で、フ、ンと鼻先で嘲つた。

「他の形あるものは盜難のおそれがありまするが、拙僧の申す十念はあなたの耳と心の中に確とお預けして置く品故、決して盜まれる心配がありません」

「成程」

主はもつともな理だと思つた。だが、十念の如何なるものであるかを知らない主は、何となく腑に落ちぬ面持で、蓮生にすゝめられるまま、何か物の怪に憑かれたやうに茫然と部屋のお佛壇の前に座つて、手を合せた。

「南、無、阿、彌、陀佛——」

蓮生の澄んだ聲は、瞬間何物をも引きつけずには置かない、凜とした、尊いひびきを持つてゐた。

蓮生の眞實の心から涌き出る念佛の聲は、何よりも尊い、何よりも深いものでなければならぬ。

「南、無、阿、彌、陀佛——」

それは、一切の醜きもの、一切の不淨れたるもの、一切の不善きものを焼盡すみほとけの聲であつた。

蓮生の授けた十念の聲が、十たび、未だ且つて念佛を口にしたことのない下品な主の口から、甘露の如くに流れ出た。

十念が終ると、蓮生は徐かにもとの座に返つて、

「確と十念をお預り申しました。今の十遍の彌陀名號の念佛と、拙僧の聲をお忘れなく」

と、嚴に言つた。

「ハイ、勿體なうございます」

主の心からは、今までの傲慢なものが夢のやうに消え去つて、僅かに十たびの念佛であつたが、それが彼の心を泉のやうに、澄んだ、清いものにした。

主から一貫文の金を受取ると、蓮生は不思議さうに見送る宿の人達を後にして、靜かに表へ出た。

そして眞夏の陽を浴びて白く息づいてゐる雜草の生ひ繁つた街道を東の方に向つて歩いて行つた。

柿色の蓮生の衣が、豆つぶのやうに遠くに消えるまで、主はそのうしろ姿を見送りながら、靜かに合掌して、念佛を唱へてゐた。

五

それから一年の月日が流れた。

故郷の武藏國熊谷の里に別れて、ふたゝび黒谷に登る蓮生坊は、一年前の懐しい思ひ出を辿りながら、疲れた草鞋の足で藤枝の宿に行く街道をコツ／＼歩いてゐた。

風も無いのに芒の穂が揺れて、四邊の山々は濃い秋に色どられてゐた。物わびしい黄金色の夕陽が一年前の日の事とは變らず、蓮生の柿色の衣を紅く染めてゐた。

蓮生の姿も變らなかつたが、宿の有様も變らなかつた。

主の部屋へ通ると、蓮生は一貫文の鳥目をすぐさまその前に差し出して、

「あの時お借した一貫文、確かにお返済致します」

と言つて、今度は着くれない毛の少し伸びて黒くなつた頭を下げた。

「さ、拙僧があの時お預りした大切な品をお返却下さい」

「貴僧から別にお預りした物はございません、十念より他に……」

「さッ、その十念を返していただきたいのです」

蓮生はさう言つて主の顔をヂツと睨めながら、淀みのない聲で笑つた。だが、石のやうに固く緊張した主の貌は、眉一つ動かさず、嚴

なものに變つた。今日が日まで、蓮生を心に待ちこがれてゐた主であつたのだ。

何故に——。主は蓮生の姿の前にヂツと手を合せながら、靜かに口を開いた。

「わたしは、貴僧からお預りした十念によつて、一貫文にまさる、尊

いみほとけの眞實の道を知ることが出来ました。十念——それは如何なる財寶よりも尊い、有難い、大切な自分の心の財寶でした。わたしは、貴僧によつて、それを初めて知ることが出来ました」

主の貌は、無上の法雨に浴したもののやうに、深い歡喜をたゞへてゐた。

「あの日からといふもの、わたしは不思議にも十念のことが忘れられず、貴僧の聲を思ひ出しては、口に、心に、一心に彌陀の名號を念じました。すると愚かなわたし



來ました」

主の心からなる法悦の物語のうちに、いつか四邊は濃い夜の色に閉ざされて、そして竹林を越えた向ふの山の端からは、十四日の月が皎々とかゞやき渡つた。

その物語にヂツと心を傾けてゐた蓮生の心の中には、慈雨のやうな感激が脈々と波打つてゐた。

「念佛はすゝめるべきではない、自ら發心して申すべきです、拙僧があゝの時お唱へした十念がそのまゝ聞き捨てられず、あなたの強い信心の機縁となつたことは喜ばしい事です、それで十念こそ、何物にもまさる、尊い財寶であることがお解りでせう。此世に生れながらにして惡人はなく、多くの人達は誰も、淺薄な煩惱のために迫はれて、うか／＼と惡趣の中に墮ちて苦しんでゐるので、阿彌陀佛の本願を信じて一心に

この名號を念ずれば、如何なる極惡重罪の者も、極樂淨土に住することが出来ます、この身、このまゝ居ながらにして現世は楽しい極樂淨土となるのです、阿彌陀佛の眞實の心に目覺めた人こそ、此世の中ではいちばん尊い、いちばん生甲斐のある人です。眞實の安心は、阿彌陀佛の名號を念じて救はるゝより他道はないと、師の坊（法然）も初めて念佛を覺り、京都東山吉水に草庵を結んで、求道の目的を達することが出来ました」

蓮生の言葉は、清き水の流れるやうに盡きなかつた。

庭の何處からか、哀調をおびた蟲の音が聞えて來た、心耳に牙え渡る靜けさの中に、それは恰も、無情迅速な人の世の理を知らせるかのやうに……。

「あの明皎々とかぐく月は、そのまゝ宇宙の心です、阿彌陀佛の心です、生れながらの人の心です、吾々の心の月も一切の惡の迷ひの雲を拂ひのけてこそ、あのやうに清くかゞやくのです、一切の惡の雲を拂ひのけるには、阿彌陀佛の本願にすぎり、一心に念ずることです」

「よく解りました、有難うございます、では十念をお返却致します」

主は急に容を改めると、蓮生に向つて言つた。蓮生は左手の二匝の珠數を右手に移して合掌すると、無言のまゝ主と共に、徐かに佛壇に向つた其處には去年見た時と違つて、常住不斷の香華が備へられてあつた。縷々と立昇る香煙の中に、佛灯がおごそかな色に耀いてゐた。

「南、無、阿、彌、陀、佛——」

「南、無、阿、彌、陀、佛——」

蓮生と主の十念の聲は一つに溶けて、寂然とした四邊に徹にひびけた。

雪にも、風にも、その他あらゆるものに征服されずにゐたたくましい蓮生の靜かに開かれた兩眼は歡喜の泪にぬれてゐた。その貌はみほとけのやうな、澄んだ、麗しい溫容をたゞへてゐた。

翌日——。

西に向つて旅路を辿る橘色の衣を着た蓮生坊のうしろから、風のやうに、黙々と隨つて行く男があつた。

それは、蓮生によつて黒谷の法然上人の御弟子となるべき、藤枝の宿の主であつた。

空は淺葱色に高く晴れて、二人の頭上には秋の陽が燦々と降りそゝいでゐた。

美しい散華のやうに……。

（をはり）

念佛とは佛の法身を憶念するにもあらず佛の相好を觀念するにもあらず、たゞ一心にもはら阿彌陀ほとけの名號を稱念する、これ念佛とは申す也。かゝるがゆゑに稱我名號とはいふ也。（法語抄一一四）

短歌

興謝野晶子選

一等 仙臺 三浦 頼子

ふるさとのみ寺も落葉つむならん
みをしへきさし堂のあたりしも

【評】 純なる信仰の柔かき心境にある人の
思ひ出は故郷の御寺であり、導かれた
る法の師の面影である。

二等 大阪 小山 文二

石清水いくさの神の朝庭にねぎこ
と申しわがひざまづく

【評】 祈念の心の清浄さが八幡と云はず、
最初の句の石清水と云つたのによく通
つてゐて宜しい。

三等 横濱 塚本 秋月

寂しとてみ墓に詣で悲しとてみ墓
を洗ふ母君となる

【評】 孤獨なる老未亡人を傷はる作者の愛
がよく現れて居ます

朝鮮 蟹江 廣吉

美しきみひかりみつる元旦のわが
大空に春來たりけり

大阪 吉廣 夏生

裏山の峰の上に立てばゆく秋の雲
の流れのさびしかりける

北海道 花田 順佳

戦ひの巷となりてあれまさる支那
の國民いと哀れなり

京都 郡司島 誠也

月かけはちぢにくだけてせせらぎ
の音さむきかなわが立てる前

朝鮮 小林 泰月

勇士の遺骨を迎ふ
つつましき姿になりても云はず

京都 細木 隆

かりそめの身とな思ひそみ戦に出
で行く士をば佛まもらん

千葉 高橋美矢子

多すでに近づくことしすがれたる
道の小草に薄霜の置く

大阪 細木 隆

たらちねの母は病みたる吾がせな
を肥えしと云ひて撫で給ふかな

鹿児島 兒玉 扶美

朽ち果てて水を手向けん人もなき
塚のほとりに逢ふ時雨かな

東京 喜代子

今日の日をひとり静かにかへり見
て夜深き窓に月を見るかな

神奈川 眞島 梅作

ねんごろに育てて咲きし菊の花う
つらふ日ともなりて霜降る

和歌山 奥村 映水

御いくさに子は召され行き老人と
妻が稻刈る月の明りに

山口 長岡 見智

我留守に盗人入りて物盗りぬ我に
も半罪ある如し

徳島 神原 梅華

千歳をば正しく経たるみ佛ぞみ眉
のあたり和やかにして

大和 奥田 竹陰

秋の丘夕日の影の淡く射す薄の道
をわがわけて行く

三重 雪佳 紫晴

いづこにもわがみ佛はいますなり

北海道 上杉 諒山

強く死につけ丈夫の友
み戦の進みきはなきその中に國民

鹿児島 兒玉 扶美

安く年を送りぬ
愛し兒の戦死を讀へ喜べど夜半の

小倉 益田 山彦

枕の濡れもこそすれ
さえざえと八幡の森のあさあけに

大阪 橋本 花汀

み鈴ふるなりつはものの母
いつとなくみ佛たのむ身となりぬ

千葉 安田 保治

かたくななりしわれなりしかど
み戦に征きし小家の庭のべに静け

静岡 一向 山人

く咲けり黄の菊の花
なつかしや生れし家へ着きにけり

長野 中山 弘

時雨ふるなる秋の夕暮
明日知らぬ身に病もちみ佛のみ名

東京 三野輪 江雪

を唱へぬ人ぞ寂しき
若人のグライダー今飛ばんとす夕

日を浴びて翼は金色

支那
童話

蠶

女

物

語

達 崎

龍 一

野 水 昌 子 畫

蠶女は、微かに響いて来る蹄の音に、快

く鼓膜を打たせながら、俯向いたまま、刺繡

する手をつづけてみました。蠶女の膝をすべ

つて、半ば出来上つた孔雀の羽根の部分が、や

んわりと足もとの床にひろがつてみました。

蠶女の動く手が、いつしらす遅くなると、蠶

女は自分がさつきから何を考へてゐたのだか

瞭りわかりました。すると、蠶女の唇に微

笑の花が綻びました。

「お父さまだわ。」

さうだ、馬を走らしてお父さまが、一直線

に夕顔の幕を裂いて、次第に家の方へ近づき

つつある有様を、蠶女はぼんやりと刺繡枠の

面に思ひ浮べてゐたのでした。

蠶女が立ち上つて、身のまはりに黙々と落

ちた色とりどりの絲巻の花びらを、急いで拾

ひ集める頃には、もう早くも馬は門をくぐつ

てみました。

けれども、どうしたのでせう？ いつもす

るやうに馬に向つて何か云ひ云ひ下りるお父

さまの氣配が少しもしないばかりか、慌ただ

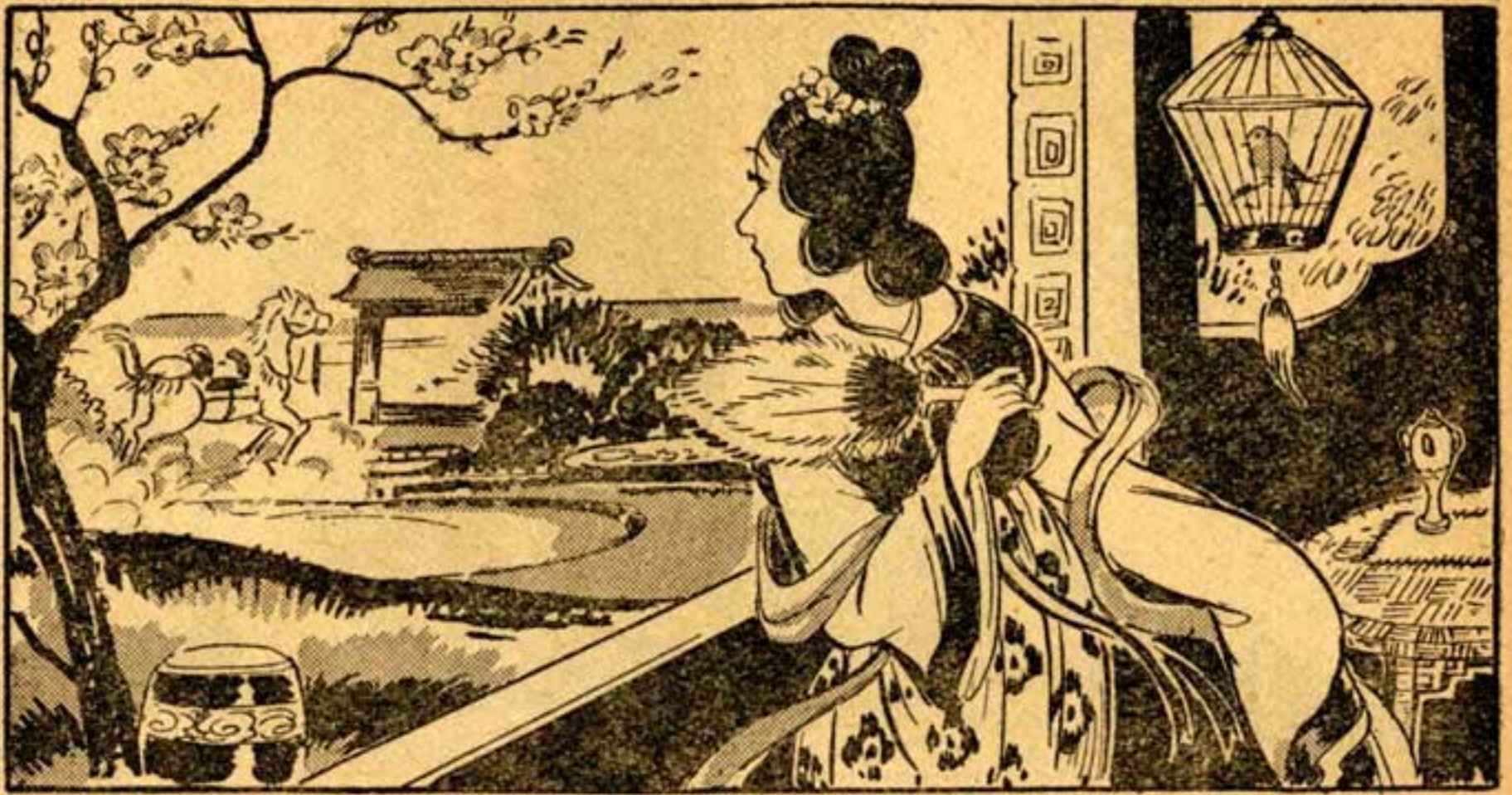
しく亂れた蹄の音が、何回となく家のまはり

を廻るのが聞えて来るばかりでした。そして

時をおいては、世にも悲しげな嘶きが、風の

やうに広い屋敷を貫き渡るばかり。――

蠶女は、お母さまと不安な顔を見合せなが



ら、窓を開いて表を見ました。すると、丁度そこを勢よく走つてゐた馬が、前足を揃へてビタリと止まつたかと思ふと、その長い鼻面をおづおづと窓べりへ摺り寄せて來ました。見れば、馬上にゐるべき筈のあのニコニコしたお父さまの影も形もそこにはないではありませんか！

馬はその長い頸を、いよく地上低くうなだれ、悲しさに鼻を鳴らして吐く白い吐息は、そこらに少しばかりさまよつてから、濃い夕靄の中に溶けてしまふばかりでした。

世は高辛帝の代になつても、まだ天下は蕨鍋のやうに煮え返つてゐました。鬢女のお父さまは隣國に捕へられてしまつたのでした。

その日から、小鳥のやうに楽しかつた鬢女の小さい胸は、お父さまを悲しむ思ひで張り裂けるほど一杯でした。——日に日が過ぎました。御飯もろく／＼食べない鬢女は、今は糸のやうに瘦せ細つた姿を窓に寄せて、一晩中、露と月光に浸されつづけてゐるのでした。お母さまは哀れに思つて、鬢女の背中を撫

でやりながら、いろ／＼と慰めるのですが、鬢女はただ押黙つたまま、遙か月に煙る國境の山々へ涙の目をやるだけでした。たうとう困つてお母さまは、或る日大勢の家來を集めて云ひました。

「隣國の手から首尾よく主君を奪ひ返して來た者には、御褒美として、鬢女をその勇士の花嫁に遣はさう。」

腕に覚えの家來達は、けれども喜び勇んで出立した甲斐もなく、敵城の見張番の放つた矢に胸板を貫かれたり、變装を看破られたりいま一トいきといふところで陥穽に入れられたり、大勢の追手に追跡されたりして命からがら逃げ歸りました。

朝に夕に鬢女の胸深い悲しみの雲は、涙の雨となつて、いつ晴れるとも見えませんでした。

すると或る日、突然、厩で馬が一聲高く嘶きました。と同時にぶつり拘繩を絶ち切つたと思ふと、前足を高々とのし上げて、馬は厩の外に飛び出しました。そして次の瞬間には

その體に呻を生じて馬は彈丸のやうに門をくぐつて出て行きました。いつぞや歸つて來た時と同じやうに——。けれども今度は反對に次第々々に夕靄の彼方に姿を吸ひ取られつづ果ては蹄の音さへ微かに、そして遂に消え去つてしまひました。

それから四五日たちました。窓に凭れて國の山々を見てゐた眞女は、遙かの方から走つて來る遠い馬を見ながら、いま自分は何か夢でも見てゐるのではないかしらと思ひました。そして眼をこすつてちつと瞳を一ところに集めて、猶もだん／＼近づいて來る馬を一心に眺めてゐるうちに、思はず眞女は窓から立ち上り、兩手を振り振り叫び聲をあげました。

「あら！ やつぱりお父さんだわ。——お父さん！ お父さん！」

全くその通り、お父さんの無事な姿が、ニコニコしながら馬に跨り、いま我が家の門を入つて來るではありませんか！

その日から、眞女を始め一同、春が立ち返

つたやうに以前の縣かさに返つたのに引替へて、何故か馬だけは秋風のやうに悲しく嘶き渡るのでした。そのうへ飼料一口食べようともしません。

眞女のお父さんは不思議な顔をして、

「これはをかしい。いつたいどうした譯なんだらう。」

するとお母さまの方は何か思ひ當つたと見えて、

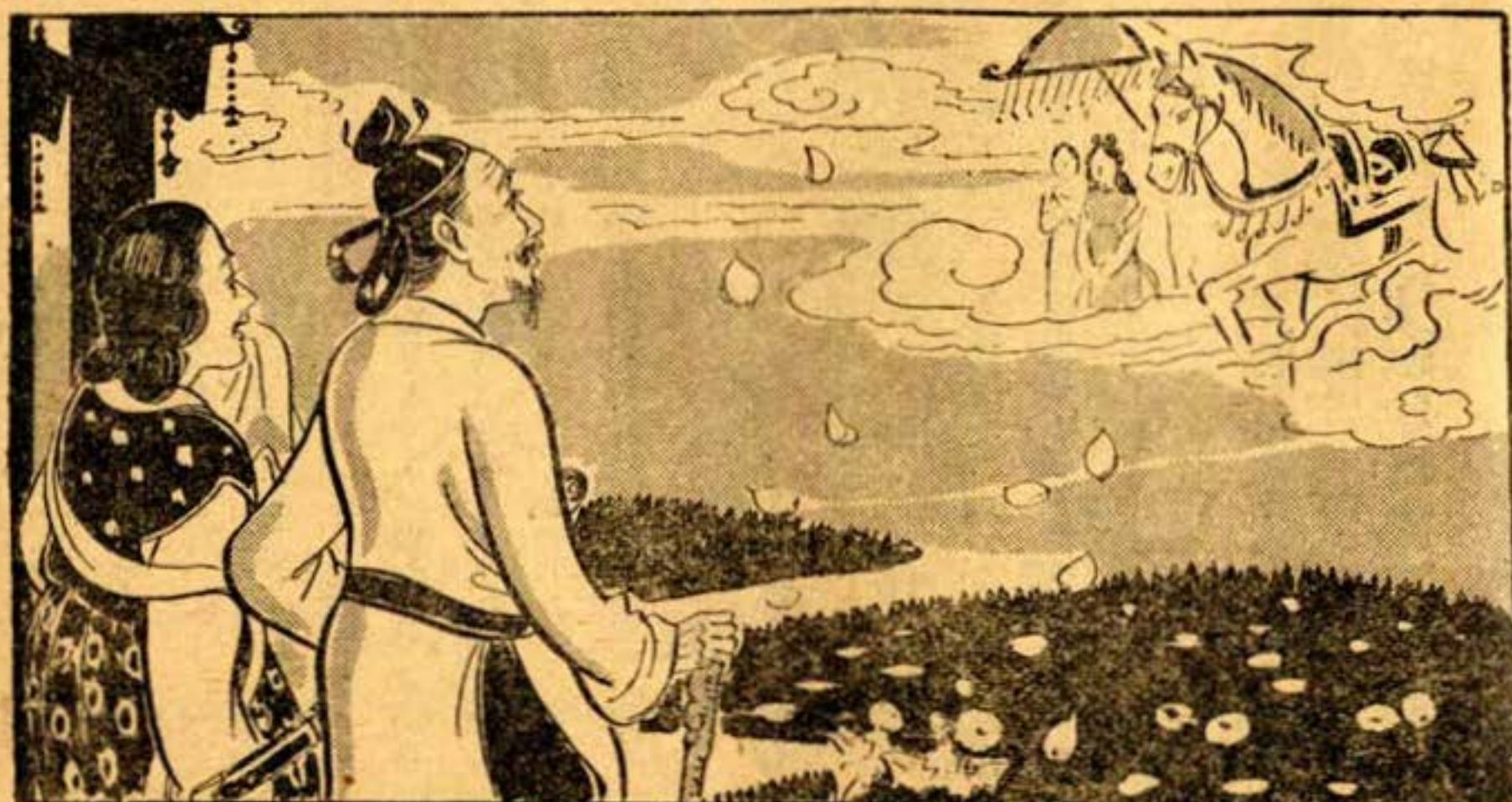
「これはきつとあれだと思ひます。貴方を國の手から奪ひ返して來た者には、御褒美として眞女を花嫁にやりませうとこの間云つたものですから……それできつと——。」

「だがそれは、人間に云つたことで、別に馬にまで云つた譯でもなかつたらう。」

「え、それはさうなんですけど……。」

「誰が可愛い娘を獸になんぞやれるものか。まあいいから飼料だけでも少し上等のを入れておやり。」

けれども馬は、どんなにおいしい飼料を入れてやつても、振り向きもしませんでした。



そして蠶女が家の中へ入つたり出たりする姿を見るたんびに、眼を火のやうに怒らし、髪を針金のやうに逆立てました。

こんなことが度々なので、とう／＼蠶女のお父さまは、怒りの弓矢をつづけさまに放つて、馬を射殺してしまひました。そしてその皮を何かにしようと思つて、庭に擲けて乾して置きました。

或る日、蠶女は花瓶に挿す桃の花の枝を手につつて、何気なく馬の皮の乾してある傍を通り過ぎました。いや、まさに通り過ぎようとしてゐました。その時でした。今までそこに大きな風呂敷のやうに擲けられてあつた馬の皮が、ガバとばかり起き立つたと見る間に蠶女を旋風のやうにぐるぐるとその中に捲き込んで、空高く飛び去つてしまひました。

するとそれから十日ばかり経つと、馬の皮は近所の桑の木にひつかかつてゐました。よく見ると、皮に覆はれて一匹の白い美しい蟲が、桑の緑葉をおいしさうに食べてゐるのでした。更に日が過ぎると、白い蟲はこんどは口

から霧のやうな糸を吐き出し始めました。すると間もなく、その蟲は雪より白い着物に包まれてコロリと轉りました。誰かが通りがかりにそれを拾ひました。そして眞ん中が少しくびれて、どちらが頭ともつかないそのコロコロした奇妙なものを、ためつすかしつして見てをりましたが、何を考へたかたうとうそれから長い長い一本の糸を手繰り出しました。美しい蟲の着物は、ほどかれて、人間の着る着物となりました。

これを見て、蠶女のお父さまお母さまは、いまさらに悲嘆と悔恨の涙にかきくれました。そのうち二人は何かの氣配を感じて、思はず涙の眼を空に向けると、今しも雲間から舞ひ散つて來た桃の花が、陽炎のもえたつ庭の芝生の上に、點々と薄紅を落してゐるところでした。そしてすぐその後から、紫の雲に乗つた金の馬が、太陽の光にキラキラ輝きながら、地上さして驅け下りて來ました。馬の上には眩ゆいばかりの蠶女の姿！ つづくは侍衛の數十騎！ 中空にピタリと止りました。

た。同時に銀鈴のやうな蠶女の聲が、窓を開いて呆氣に取られてゐるお父さまとお母さまの耳に響いて來ました。

「どうしてそんなにお嘆きになるのです。わたしの雪よりも白い心は、いま佛様の國へ來て楽しく遊んでをりますの。蠶女はですから決して死んだのではございません。佛様たちにおよばれして暫くここに參つてゐるのですわ。ここはどんなにでも永く生きてゐられる所なんですから、どうぞそんなにお嘆きにならないで下さい。お父さまお母さま！ ではまた、さようなら——」

そして行列は、もと來た空の中へ引返して行きました。金の蹄鐵をさん／＼と光りに蹴返しながら、白雲の峰を越え、青雲の谷を渡り、そしてたうとう空深く見えなくなつてしまひました。

——蠶女が桃の花を手につつたまま、突然消え失せた陽炎の庭は、丁度今の支那の什陽縣、緬竹縣、德陽縣の三縣の境にあります。



正月の酒と土佐料理の話

田中貢太郎

某新紙の記者に土佐の料理に就いて話をしたところが、私の詞が足りなかつたか、先方がよく聞かなかつたか、間違ひだらけの記事が出たので、それを訂正する意味もあり、また正月の酒と云ふ意味もあつて、土佐料理の話をしてみよう。

土佐料理、土佐の魚のことを考へると、私はいつも鯨の味を思ひだす。鯨は今は南洋まで往つて捕獲するので、土佐の歳事記から除かれたが、すくなくとも二十年前までは、鯨は土佐の歳事記中の魚であつた。此の比土佐の俗語に、『云ふたちいかんちや、をらんくの池にや、潮吹く魚が泳ぎよる、』と云ふのがあるが、私の少年の比には、鯨が海岸近く来て黒い背を出して潮を吹いてゐるのをよく見かけたことがある。従つてその比は、土佐の兩端になつた室戸岬と嵯陀岬の双方に捕鯨場があつて、其處で捕獲された鯨の肉は、冬から春にかけて高知市方面へ来るので、土地の者は東京あたりで秋刀魚

を喰ふやうに、帆立貝で作つた鍋で鋤焼にして喰ふのが年中行事の一つであつた。鯨には一種特別な海獣の匂ひがあつて、それを極端に嫌ふ者もあるが、水菜を下敷きにして小豆身の佳いので煮たのはたまらなく旨い。日本で鯨を賞美する處は、大阪方面で、従つて佳い肉は高價で貧乏人の口には入らない。

鯨と同様に、松魚も今は發動機附の冷蔵庫の設備のある漁船によつて遠く外洋で捕獲せられるので、土佐の歳事記の魚でなくなつたが、しかし土佐で尤も賞美する魚は、何んと云つても松魚である。松魚は刺身にもするが、土佐人の好んで喰ふのは、松魚のたたきである。それは松魚を刺身に切るやうにしておいて、それを鐵架に乗せ、藥か茅のやうな軽い火で、ぼつと外面だけあぶつたもので、要するに松魚のテキである。それには焼く前に鹽をまぶして焼き、焼いた後で蜜柑酢のやうな物をかけて分厚に切り、そのまま喰ひもす

れば、醤油ばかりかけて喫つてもいいが、それには必ず大蒜の芋が添へてあつて、たいきと一緒に喫ふことになつてゐる。輩を嫌ふ者は問題外だが、たいきを喫つて大蒜を喫はない者は、たいきの三昧に入らないものである。

土佐では松魚の他に、青魚や鰯をたたきにするが、それもなかなか珍味であるから、私は青魚の季節には、青魚のたたきをこしらへる。後藤象次郎、岩崎彌太郎などが豪遊した比には、新橋あたりにもたたきを作る料亭があつた。

*

土佐では、また鰯が賞美せられる。鰯の古名はなよし。土佐へ往つて好遇せられる者は、そのなよしの料理を喫はされる。なよしの鰯を獲るには、釣りもし唐網で打ちもし、盛夏の比には、簀鰯と云つて浅瀬の上に簀を浮かして、地曳網で曳く様に左右から追ひたて、簀の上に飛びあがらして獲る方法もあるが、客をもてなすは、廻はし打ちと云ふのをやる。それは大きな唐網を持つた漁師の舟が、十艘も二十五艘も、多い時には四五十艘も集まつて、魚のゐさうな處を圍むやうにして打つのであるが、それには不文律の掟があつて、魚を多く獲つた舟が、次の場所では早く打つことになるのである。この廻し打ちは壯觀で、御馳走以外の御馳走であるから、詩酒に趣を持つた名流の歡待には、必ずこの廻し打ちが催される。そして廻し打ちをして魚を獲る一方では、主客は屋形船に歌妓を擁して、其の壯觀を見、且つ杯をあぐるのであるが、肴には獲物の鰯の料理が並べられる。

鰯の料理で旨いのは、湯鰯である。それは鰯を刺身のやうに切つて、湯の煮たつた鍋の湯の中へ入れて、すこし煮たのを蜜柑酢と醤油を割つた汁へつけて喫ふのである。要するに鰯のちりである。秋の松茸の比には鰯と一緒にくだにして煮るのもいい。鰯頭と云つて鰯は頭を珍重するので無論頭は捨てずに煮る。



最後の鑑賞

山案内人「落ちないやうに氣を付けて下さいよ。こゝは危ないところだから。だが、萬一落ちて仕舞つたら忘れずに左側を見て下さい、とても素晴らしい景色だから。」

逆襲また逆襲



婦人「たつた今、うちの人の頭にお皿をぶつけて壊はしてしまつたから、新しいのを買いに來たのよ。」

鰯は湯鰯の次は、酢の物であるが、鰯通は骨を取らないでぶつぶつに切るのである。それから馬琴の所謂東海のなよしのすばりである。すばりは鰯のことで、その場で獲りたての鰯の背を割つて飯を詰めるのであるが、東京あたりではとても喫はれないものである。ただし鰯は、潮の中にあるものでないと、沼や池にあるものは拙くて泥くさくてとても喫はれない。

鰯も鮎もそれぞれお國自慢の中に入る魚で、到る處に日本一の名があるが、其のためしにもれず、土佐にも日本一の鰯があり、鮎があり、ごりがあり、うるめがあり、かまぼこがあり、然り而して鰯節がある。

東京の食通は、何處の鰯が旨い、何屋の鰯がいいと云つて、如何にも鰯がその家で製造せられ、もしくは其の家の生簀ばかりに住んでゐるもののやうな云ひ方をするが、旨い鰯は谷川の荒瀬の中に住んでゐるものが第一で、第二は荒海と入江の境に住んでゐるもの、第三は普通の川、下の下は泥の多い池や沼に住むものである。養殖の鰯は玆ではいづれの部に屬するのかわからないとしておく。

ごりは五分から一寸ばかりの鰯のやうな小魚で、土佐では谷川の瀬にすむ此の小魚を獲つて、河原で卵おとしにし、それを肴にして酒を飲むのが行樂の一つになつてゐる。それを行ふことをごりおしと云ひ、ごり喫ひと云つてゐる。

うるめ鰯は、豊後水道で漁獲せられるが味がいい。それでうるめ鰯は、九州方面から伊豫方面からも來るので、土佐の歳事記に入られないが、干しかげんに於いて鰯かけにおいて、土佐のうるめ鰯は、その白眉であることは食通の何人もみとめてゐるところである。土佐の正月の酒にこのうるめ鰯がなくては物足らない。

番頭「へえー それではお主人はさだめし氣絶でもなすつたことでせうな。」
婦人「いゝえ、氣絶なんかするものですか。だから、また新しいのを買いに來たのよ。」
これは意外!



新規雇入の養鶏係
「私の係りの雛つ子が皆んな死んちまつたんですが」

監督「何にツ死んだつて! 一體雛にどんな餌をやつたんだ?」
養鶏係「へえー、餌をやるんですか? 私はまだ親鳥が雛に乳を飲ませるのだとばかり思つてゐましたよ。」

なる程!

先生「五十年前には無かつた物の名前を擧げて御覽なさい」金太郎「ハイ、先生!それは飛行機と自動車です」先生「よろしい、それからもつとあるでせう?」金太郎「ハイ僕もさうです」



友に答へて

佐藤 春夫

君が戦を好まないのはよろしい。わけて宗教家として當然の事である。否、東海君子國の臣には一人として戦はおろか日常の争をさへ好むものはない筈である。しかも雨ふつて地固まる争を敢てしないのは怠惰であり怯懦である。争ふべきを争うてこそはじめて君子である。さうして起つてしまつた争に際しては飽くまで勝たなければならない。これが現實の道だからである。我等は邦家の將卒はもとより銃後の民を擧げてこの現實を自覺してゐるのを喜ぶ者である。さうして君よ、理想に生きる若い宗教家たる君よ、君はあらゆる場合にかうなければならぬやうに、この現實に直面してもなほ君の思想を深めなければなるまい。この現實から君

は既に多くの事を學んで僕に告げられた。それ故僕としては君がうっかり考へ残してゐるかと思ふ二三の點だけに就てここで述べたい。君が戦争を恐るべく厭ふべきものとしてより外に考へ及ばないのは失禮ながら凡下の常識で君らしくもない考へ方である。同類相食むといふ事實も刻々死に直面するといふのも皆、戦時の状態のみとは限らない。平時に於てすら人は皆これである。但々、我々の良心が衰へ認識が曇つて非常の場合以外にはこれを感じ得なくなつてゐるのである。然らばこの非常事件に直面して人生の真相を君が知り、さうして君のお説教を聞くすべての人々に悟らせるためには絶好の機會であらう。人々が日常忘れてゐたこれ等の多くの事を

戦争が教訓する事を感謝していいではないか。抑もこの非常事件は非常であるが故に平素の神経と平素の理性とでは堪へ得ないものも多いであらう。個人と家庭とは平常の人生の住み家である。しかし國家といひ世界といふ更に大きな立場が人生にある事をも知る必要がある。否、この非常事件は個人や家庭といふ日常生活基準から人生をば擴大したところへ連れ去つてしまつてゐるのである。奉公の精神といふへこれは寧ろ宗教の情操に屬するものゝを我々の多くは平素あまり忘れ勝ちである。しかしこれは決して人類の生活で永久に忘れ去つてよいものではないから、時あつて高價を支拂つてでも思ひ出して置かなければならないものである。我々の民族は近代あまりに泰平に慣れ日常の幸福に甘えすぎてゐた。この反省のためにも現在の時局は非常に役立つてゐる。平常の低い常識から見えて氣の毒なのはこの喧に當つてさまざまに苦しむ人々である。彼等は我々に代つてこの苦しい立場に立つてくれてゐる。この感謝へこれも宗教情操に屬するものゝを一刻も忘れない事をこの際我々各自にすべての人々に要求しなければならぬ。戦死者の遺族達には民族の愛、國家への

報恩の重大な意義を高唱してその理を明し、その理が彼等の感情になるまで説き明す必要があらう。即ち君自ら最も高い最も深い愛國の熱情を、これがためには一死辭せざる底の熱情を抱いてゐなければ人を説得することは不可能であらう。努めてこゝに到達されよ、これ亦報恩を生活する宗教家の義務の一つであらう。集團の生活の尊重、生死觀の解脱みなこの際に説いて然るべき問題ばかりであらう。ただ俗情で氣の毒な哀感だけですまないで、もつと深く宗教の眞意義を解き明すべき機會、従つて君これを自ら考へるべき機會が多いわけであらう。願はくば通俗な人情に溺れることを慎しんで徹底した境地に相手を誘ひ入れたいものである。彼等の爲に兒女の涙を蹙ぐ代りに日常の生活情操より更に高い境地に別世界のあることを感じさせ納得させることが出来ないくらゐならば寧ろ現實を凝視しつづける大丈夫の冷靜を保つて、お互に御稱名に日を消すより外はあるまい。いづれ拜眉の機に申し上げようと思つた事です、簡略に申上げました御判讀下さい。

隨 想

富 士 と 蜜 柑 中 野 尅 子



私は、駿河路に来て楽しいことは富士山を見ることが、蜜柑畑を見ることがあります。關西の田舎に育つた私は、駿河に来て富士山を見ることが一番うれしい。

アノ碧空にクツキリ聳え立

つてゐる、眞白な姿を見ると、堪らなくうれしくなつて、子供のやうにいつまでも飽かず眺めてゐる。そしていつも笑はれてゐます。

富士は殊に峰よりも裾野が好い。富士驛あたりから見る雄大な裾野の美は、何とも云ふに云へぬ太い、丸々した線を感じる。富士の天邊を描いた繪は多いが、あの裾野を雄大に

取扱つたい、繪が現はれてもいいと思ふ。天邊の美は顔の美で、裾野の美は腰の美です。美人を顔で描きたがるのは幼稚で、本當は腰の丸々と肥え上つた、肉付きのいい太い線で強く描かれた美人畫こそ、本當の美人の本領を擧げたものでせう。

飛んだ富士の逆觀になつて了つたが、本當に富士は上から見ても、下から見ても好い。左右半面だけを切り離して見ても面白い。實際、圓重の浮世繪以上、富士の描き方はまだ幾通りもあると思ふ。いや描くのではない、富士の心根にたづね入つて、其の想ひを描き出すのでなければいかぬ。全く富士は日本の眞中に半身を現はしてゐる活きた美人像である。永遠に年老ゆることなく、其の若やかなる美と匂ひとをたゞよはして、其の神秘なる心情を微笑みの力に物語つてゐる、不思議なる存在である。十七八の娘だといへば、さうとも見える。三十七八の年増だと云へば、さうとも見える。七八十の白髪の上品なお婆さんだと云へば、さうとも思える。いづれにし

ても、誰が完全に彼の女の心を掴み、彼の女のことを表現することが出来るだらう。近寄つて行けば、近寄つてゆく程、彼の女の心は氣高い、底深い。日本にはいゝスフィックスがある。日本には尊い女神像がある。つまらぬコンクリートのケチな像を造るより、なぜアノ生きた菩薩の温かい肌に觸れようとせないのだらう。日本の血潮が冷却せない限り、あの富士山の美しさは變らぬ。あの莊嚴な姿の崩れぬ限り、日本の精神は脈々として高鳴る。



思はず富士の禮讃が長くなつて了つたが、遠く富士を仰いでみると、とめ度もなく感情が流れて来る。眼を足元に轉ずると目の前には、山から山へと見渡すかぎり、累々として稔つてゐる蜜柑畑の賑はひが、又何とも云へぬ。無性に子供氣になつて、はしやぎたいやうな、アチラ、コチラと走り廻り躍りたいやうな心になる。

今は收穫の最盛期で、私のやうにそんなノ

ンキなことは言つて居れぬ。人々は眼ばかりになつて、此の短い午後の陽足を逐うて懸命に働いて居る。私は案内して下さつた作男のお爺さんに、素人らしい質問を放つた。

私「仲々、これだけにするまでには骨が折れるでせうネ」

爺「骨の折れるより、可愛いばかりです」

成る程、此のお爺さんは、私などとは違つて、蜜柑を作ることを子を育てるやうに思つてゐるらしい。骨が折れるナンとは思はずに、可愛い方が先きに立つてゐるらしい。成程なア……と、私は、此の一語で感心して了つた。

それで「もう下手な質問は出来ぬぞー」と思つたが、外に訊ねる方法も知らぬので、

私「それで、今年の作はどうですか、いゝ方ですか」

爺「私の方の盡しようが足らぬばかりです。よく生つて呉れると思つてゐます」

私達は、收穫が多かつたとか、少なかつたとか云うて、收穫の多少にばかり目を附けて

ゐるが、此のお爺さんは、自分の手の盡しや

うが良かつたか、悪かつたかにばかり目が着いてゐるらしい。従つて相場だナンといふ事は、第二に置いてゐるらしいぞ。いや相場を超越して居ればこそ、斯ういふ人の荷は、名が通つてゐて「相場なし」に飛ぶやうに賣れて行くのだらう。成程、よく賣れる物を造る人は、違つてゐると、わからぬなりに感心せられました。それから、専門的に色々な話があつた後で、お爺さんが

爺「私は、皆の人が、蜜柑の身だけをたべて皮を捨てゝやる氣が知れぬ——皮も蜜柑ですよ……」

と云つて、蜜柑の皮をむき乍ら、皮と身と一口づゝ代り番に混ぜて、一緒に喰べて行くのを見て、私は吃驚仰天した。凡そ、蜜柑を皮ぐるみ喰べるナンといふことは、聞いた事も見た事も無い私は、眼を眞ん丸にしてピツクリして眺めてゐた。そして私に、貰つて手に持つてゐた大きな立派な蜜柑を、そんな事を知らずに、皮をむいて捨てゝやつて喰べでもしてゐたら、此の頭周一徹さうに見える親

父さんから、どんなに嘔吐られたか知らぬと、危く自分を振返つてクスグツたと思つた。そして私はもう一度、爺さんの云つた言葉を、自分の腹の中で味つて見た——

「皮も蜜柑ですからネ……捨てゝやる氣になれませぬ——」

と、成程！ 皮も蜜柑だ。私達は、皮は蜜柑でない、中の袋だけが蜜柑で、外の皮を捨てゝやるものだとして決めてゐるが、成程皮も蜜柑だ、丹誠籠めて造つてゐる人から見れば皮も蜜柑の筈だ、皮も旨いのだらう。中味だけは旨いが、外はいらぬものだ、などと云ふのは私達素人の云ふことで、これは皮ぐるみ丸喰へる方が本當かも知れぬぞ——と思つて、お爺さんの通り、眞似て、皮と中味と一口づゝ混ぜて喰べてみると成程旨い。よく味つてみると袋よりも皮の方が旨い、都會で、採つてから半月も経つた蜜柑を喰てゐた者にはわからぬ事だが、枝から採りたての瑞々した蜜柑をたべてみると、成程、お爺さんの云ふ通りだと一大發見をしました。そして此の

皮も蜜柑だ——

捨てるものは何もナイ

皮ぐるみ丸々喰べよ！

といふことが、後になればなる程、偉大なる公案——教へとしてハッキリ浮かび上つて来る。そしてこの蜜柑を初めて皮ぐるみ喰べた時の味が、シツカリ心に焼き付けられて、

此の味だ！
此の味！
と、事にブチ當る度に、アノ味が思ひ出されて味ひ深く味つて行ける。



私達は、思はぬ金でも拾つたり、思はぬ土産物でも貰つた時はニコ／＼してゐるが、大事な財布でも落したり、忙しい最中に持病でも起こすと、

「畜生癪にさはるなア……」

と、何度、思ひ返して見て残念で溜らぬが、實際は、金を拾つた時より、金を落とした時の方が身の爲めになつてゐるのぢやないでせ

うか。それも一圓や二圓でなく、千圓も二千圓も、無くてならぬ金を落としてもした方が、一生の大きな得です。落としたのは一度でも、もうそれからといふものは絶對と二度と落とさぬ。損したのは千圓でも、その損失を取り戻すが爲めに、人間が一生、生れ更つて引緊つたとしたら、その儲け出しは何千圓であるかわかりません。病氣でも、病氣してたが爲めに悪い相談に引擦り込まれなソだとか、病氣が元で精神的大轉換をして更生したとか。物事は、何が良いやら、何が悪いやら、どこまでが不幸やら、どこからが幸福やらわかりません。だから一概に、不幸だとか、不要だとかいうて排斥は出来ぬ。皆良いと云へば皆良いので、皆な良い事を、よく良うせぬだけぢやないでせうか。それを思へば何でも丸々、丸喰ひにして、皆な、滋養にしてふ人が一番偉いのだ。又一番本當なのだ。アレが嫌ひ、コレが嫌ひ。これは不旨い、アレはいかぬと、コゴトを云うて好き厭ひして、何も彼にもをより喰べぬ者こそ弱蟲でカ

ラダも悪い。

蜜柑でも皮はまづい、捨てゝやる物だ、喰べれぬことだと決めてゐる心が我儘で、實際は「皮も蜜柑で、たべて見れば皮も旨いぢやないか。作るのにも骨の折れてゐた皮を、ナゼ投げ捨てゝやつて、皮は無駄な物と決め込んでゐたのか、思へば了見が狭い。一切を攝取し、ソレによつて寧ろ教へられてみると實で、こんな結構な事はなく、コレ以上のものはなかつたのです。

即ち、幸も不幸も、爲めも不爲も、成功も不成功も、好悪、善悪、利害、長短は、皆、自分の「はからひ」目安に當て符めて、難癖をつけてゐるので、その「尺度」、その「我見」こそブチ破らねばならなかつたのです。

だから、蜜柑を皮ぐるみ丸ごと、口の中へ無理に押し込められて、眼を白黒、バチクリさせて呑み込んでやつて見ると、初めて、

「成る程、なア……」

と、ものゝ實相がわかるのです「實相」とはものゝ丸ごと、全體がわかつたことです。今

迄は、ものゝ片ごと、半面しか知つて居らなかつた。宗教とは、此のものゝ全體、丸ごと、丸喰ひにすることです。

◇

戦争なソて良いことぢやない。而し、此の良い事ぢやない戦争をも良くしてゆくのが本當ぢやないでせうか。

いや、これが良くなる元だ。

敵も味方も、一切が、良くなるが爲めに賦へられた最大の機會だ。

戦ふ時にはウンと戦つて、戦ひを眞の戦にすることだ。

「善い悪い」は、爲さずして理窟を云つてゐる傍觀者のヘラズ口だ。

戦はんならぬ者には、戦ふより外ないのだ。戦つて、戦ひを「最上の戦」とすることだ。

失ふときには、失ふことを「最上の失ひ」とし、病む時には、病む事を「最上の病み」とし、死ぬ時には、死ぬ事を「最上の死」と

するより、私にはないのだ。

だから、私には寒處にはコレを寒殺し、熱處にはコレを熱殺して、熱い風呂へは熱いが儘で這入り、微温い風呂へは微温いが儘で這入り、這入れぬ時には這入れぬ儘でやめる。だから、いつも不自由はない。生きられる間は飽くまで生きるが、死ななきやならぬ時は死ぬ。金も有る時は有る覺悟だが、無い時は無い覺悟。食へる時は食へるのだし、食へぬ時は食へぬのだ。と覺悟すれば腹の減つた儘でも辛抱出来る。寧ろ痛快にも思へる。それ以上、ドコまで耐へられるかと餘裕まで生ずる。死ぬ時には、死ぬ事までが興味深く面白くなつてみたい——。

だから、いつも愉快で「蜜柑の丸喰」だ。

喰べて見ぬ内は、そんなものはまづい。そんなものは喰べれるか知らんと思ふが、喰べて見ぬと案外喰べれる。喰べて見た味は、喰べて見た者でなくてはわからぬ。

人生を、本當に「たべて見る」ことが人生で、そしてソレが宗教ではないだらうか。

隨想 佛を焚く

佐藤 賢順

寒い朝の庭掃除の後のことであつたらう、枯枝や朽葉や、燃えさうなものを一通り掃き集めると、それで焚火を始めた。枯枝がパチパチと微かな音を立て、燃え始める。紫のふんわりとした煙が、まるで人間の思想のやうに、あとからあとからもくもくと上つて、凍てついた冷たい蒼空へ吸ひ込まれてゆく。山僧はその煙の行く末を、考へ深さうに眺めてゐた。浅葱色に晴れ渡つた空には、縋を千切つた程の、小さな雲が一つ浮んでゐた。

一本の枯枝のチロロとした煙が、その隣の枯枝を嘗めると、それが又小さな煙となつてパチパチと音を立て、行つた。

火が衰へると、彼は又、箒と塵取りを下げて行つて、庭の隅から枯枝や落葉を掃き寄せては、焚火にくべた。

火がもとの勢を取り戻して、淡紫の煙を上げ出すと、ま

たその行方を見守るのである。

「この方が餘程いゝ、つまらない本を讀んだり、人間を相手に下らない話などしてゐるよりは……」

——「焚火は瞑想の燈」——

そんな言葉がふと唇を飛び出しさうになつた。

けれども、枯枝や落葉はもうあらかた焚き盡してしまつた。

もう一暖まり暖まりたいと思つてゐた所であつたのだらう、彼はふと何か思着いたらしく、僧堂の中へ這入つてゆくと、一軀

の佛の像を下げて出てきた。

驚いたことには、その佛の像は煙の衰へかけた焚火の中へ、

その儘くらべられてしまつたのである。暫くすると、それがブ

スブスと音を立て煙を上げ始めた。

丁度その時、同行の一人の僧が、折悪しく其處へやつてきた。

彼も亦、焚火に暖まらうと、火に近づいてみると、一軀の木像

がブスブスと煙つてゐるので、驚いて聲を擧げた。

「一體何を燃してゐる。佛様ぢやないか。氣でも狂つたのか」

その聲は怒りと恐しさに戦き、その手はやにはに箒を握み取

つて、燃えかけてゐる木像を焚火の外へ放り出した。

『どうしたのだ』

『舍利を取つてゐる所サ』然し相手は平然と言つた。

註釋を書くには及ぶまいが、舍利といふのは佛の骨のことで、

釋尊がお亡くなりなされたから、その御遺骸を火葬にして、佛舍利は八ヶ國の國々に分けて葬り、それぞれ舍利塔を築いて御供養したといふ、それ程大切なものである。

『これは木で作った佛像だ。燃したつて舍利なんか出やしない』と疊みかけてなほもその亂暴を詰つた。

『木なら燃したつて好いぢやないか』

相手はさう答へて恬然としてゐた。

筆者の記憶にして誤りがなければ、この山僧とは丹霞禪師、勿論支那の昔の話である。

この物語は色々な問題を提出してゐる。信仰と崇拜の對象である尊像を、斯も同様に火にくべて燃してしまふといふのであるから、啞然たらざるを得ないであらう。而も「五家正宗贊」の著者、希叟和尚は、「木佛を焼いて遺風未だ泯せず」と贊して、釋尊の遺風茲に失はれざるを賞揚してゐるではないか。

何處其處の觀音様は靈驗あらたかであらせられる。これこれの願をかけて三七日の參籠をしたら、満願の曉、夢のお告げに現れ給うて、これこれの御利益を授けて下された。

いや、どこそこのお地藏様は、夜になると、こつそりと歩き出されて、お地藏様を信心する者の家まで來られて、その家を

お守り下さる。いつぞやも、誰れそれが大火傷をするところを、地藏様のお守札が身代りとならせられて、お守札は焼けてしまつたが、日頃信心する地藏様のお力で、危く難を逃がれることができた。それが證據、その日以来お地藏様の頬には錢形の大火傷の跡がついた。

あそここの阿彌陀様は、御來迎にお忙しくおはすと見えて、お臺座の上には、何時もおみ足の跡が着いて御座る。

かうした淳情そのもののやうな素朴な信仰を、私達は數限りとなく私達の身邊に見聞きしてゐる。こんなにも美しくたゞ一筋の信心を私はそのまゝにそつとして置きたい。何の批判も要らない、何の科學も要らない。この純粹な一筋の信心に宗教の凡てが秘められてゐる。少くともそこに宗教の重要な方向が指し示されてゐる。それなのに、それ程に有難い筈の尊像を、排佛の荒武者がではなくて、佛者自らが、火にくべるとは。

木佛、金佛、石佛にそのまゝに靈驗不可思議な力がある。人間の力を遙かに超えた力が籠つてゐて、願をかけた者はその力の御加護を得て限りない御利益にあづかることができる、といふ信仰は誠に主情的で直截でその上美しい。けれどもそれが純情で一筋である間は良いが、人間の慾望には限りがないから、悪くすると、瞋みが一つ叶へられると又其の次のお願ひ、それ

が叶ふと又その次の、といふ風に不純になつて穢らはしいものが雜つてくる。さうなると、長いわづらひの病人がのべつに醫者を取りかへるやうに、あの觀音様は利目がない、あつちの不動様の方が利くやうな氣がする、と苛立しい佛巡りを始める。かうなつては肝腎の心の安らかさを求める爲の信心が、まるで別の結果を招いて、果しなき焦燥の中に悶えるばかりである。佛像そのものに超自然的な力があるといふ信仰はかういふ時に崩れる。

批判的であることは、必ずしも必要ではないが、主情的であると共に主知的でもあり得れば猶更結構である。主情的であると共に主知的であるなどいふことは、できないと言ふならば、純情を慧智で裏づけると言つても好い。佛の像そのものに超自然的な力があるなどいふ言つても、今の世代の、知識主義を基礎とする教養を受けた人々を、肯かすことは、全く不可能なことであらう。

阿彌陀様の前に立つてみよ。其の兩脇には觀音、勢至の兩脇士が侍立し在します。いづれも阿彌陀様の滿徳のうち、最も著しいものを、即ち觀音菩薩は大慈悲門を、勢至菩薩は大智慧門を、開いて示すのである。またお釋迦様の御像の兩脇には通例文殊と普賢の二菩薩が侍立し在します。文殊は智慧を、普賢は

行願を、これも亦それぞれお釋迦様の限りなくき人格の深一端を象徵する。これら三尊は各々別なのではなくて、相即して一佛に歸一するものである。一言で言へば、これは佛の教の理想は情意と智慧と、實踐と認識と全く歸一し相即した所にあることを示すものに外ならない。

さてそれならば智慧の眼を開いて、佛像を眺めた時、それは如何なるものと見えるであらうか。佛像そのものに超人間的な力が籠つてゐるとする考へを、冷靜な智慧によつて反省した時には如何なる見方が生れるであらうか。佛の像などたゞの木片だ、そんなものは金屬の塊に過ぎない、いふ考へ方であらうか。さういふ暴露的な、而も得意氣な考へ方は屢々私達の接するところであるけれども、智慧によつて感情を裏づけるとは、單に知識主義に立つて暴露的な批判をすることではない。智慧は知識ではない。木像が木片であり、金銅佛が金屬の塊に過ぎない位のこととは、解り切つたことであるに違ひない。丹震和尚が木像を焚いたのは、こんなものは只の木片に過ぎないと思つたからであらうか。勿論さうではない。

私達は偶像を崇拜してゐるのではない。尊像を悟りの象徵として拜むのである。それは無上等正覺の象徵である。象徵とは單に印とか、現れとかいふ簡単な意味ではなくして、その物を

通してその背景に潜む一切のものを徹見し洞察する手が、よりを言ふのである。一木一草に佛性を見るとき、一木一草をこの意味に於いて一つの象徴とすることである。「眼は心の窓」眼を通して心を讀むのである。象徴といつても、たゞ眞想的にそのものを通して其の背後にあるものを、例へば眞理を、靜觀してゐるといふだけではない。尊容嚴かに美はしき形像に於いて満徳圓具の人格を拜するのである。尊像を通して人格としての如來の大慈悲心を仰ぎ、衆生救済の大願力を頂くのである。象徴を通して、人格として仰がれた佛の大慈悲心と衆生とが一つに結ばれなければならない。

佛像が象徴に他ならないといふことが解れば、必ずしも佛像によらなくとも、他の如何なるものを以てしても、同じ役目ができる筈であらう。また、象徴など必要とはしない、直々に佛そのものに觸れることができるといふ人には、禮拜の假の對象となる形像も亦要らなくなるであらう。のみならず、却つて形像に餘りに執着することは、面白からぬ結果を招くに違ひない。丹霞和尚が木像を焼いたのは、さういふ複雑な心持からであつたと想像される。

それならば、佛像は御安置してもしなくてもよいのか、といふことが問題とならう。また丹霞流にもつと突き進めて言へば、拜む假りの對象など無い方がよいのか、といふ疑問が起るであ

らう。答は極めて簡單である、無ければいけないといふことはないが、有るに超したことはない。而もその尊像が藝術的に優れ、その上由緒の深い作品であればある程、尙更結構である。名僧や名工が自らが感得した佛を表現するのに、精根を傾け盡して刻み出し描き出した例は數限りなくある。そこには人間の力を超えて、美しさと聖らかさとが表現されてゐる。一刀三禮——それは文字通り一刀ごとに三禮したのではないにしても、心持はその通りであつたらう——の誠を盡して彫り出された程の尊像であるならば、これを仰ぐ者をして自づと拜跪せしめるに違ひない。

奈良や京都を旅すると、度々かういふ佛像を拜むことが出来て有難い。奈良の博物館に入ると、居並ぶ尊像の莊嚴さに、身體中が引緊まるのを覺える。

『これは彌勒だ。あれは十一面觀音だ』

『あの眼の切れ工合、耳の長さと顔の長さとの割合、あれが白鳳期の造像の特色だね』などと語り合ひ、科學的に分析して觀賞してゐる人達の態度も良い。然しそこには何か缺けてゐるものがある。それだけでは何となく不満足である。

せめて所々に香爐が置いてあつて、香を焚きつゝ心ゆくまで拜むことができたなら、などゝ博物館へ行く度に思ふのである。

支那無錢縱走舊記

柴田玄鳳

(カウトは萬壽山昆明池畔の有名な啼き牛)

一、營口出發

話は大分古いが、大正元年十月、私は當時支那開教使を命ぜられて、滿洲の營口教會所(今の正念寺)に駐在してゐたが、突然に奉天駐在開教使の故八木快運君が訪ねて來た。八木君は前來から肺を病むで居り、其頃は稍少康を保つてゐたが、來るべき冬を無事に過ごせるや否やが危いことを自覺し、折角支那に來て六年も七年も開教事業に努力した思出に、生前一度は支那内地の豪華な風光を見て死にたいと思ひ、これから天津北京へ行く途すがら一寸立寄つ

たのだと云ふことである。私はこの悲壯な言葉を聞き、病苦に瘠せた男が一人で遠方へ旅立つのを見送るに堪へない氣持に驅られ、「それぢや私も一所に行かうか」君が來て呉れりや結構だ」とのことと、有りだけの金、僅に七十圓を浚へて翌日營口からの便船に乗つて太沽に向つた。

私が八木君に同行したに就ては、も一つ理由がある。それは八木君の支那語が頗る怪しいもので、在滿七年といふ點では遙に私よりも先輩であるが、正式に習つたのではなく、單に聞き覚えの支那語であるから、日本人に慣れた滿洲の支那人には通じ

るが、支那内地では役に立たない。私は漸くその前年の、而も年末に渡滿したばかりだが、早速本物の先生を聘して學習し、約六ヶ月間一生懸命に勉強したお蔭で、私と對話する程の支那人は大抵上手と褒めて呉れてゐた。後に昭和五年の初夏、大連で恭親王殿下に拜謁した際にも、もう其頃は殆



んど支那語を忘れてゐたが、二三お話すると、側近の者に「此人の中國話は頂好だ」と語られたことがある。その自信があつたから、不意に同行する氣になつたのである。

二、太沽、天津

太沽へ着いたのは夕刻八時頃であつた。

其晩は天津行の汽車が無いので、碼頭に群がる宿引の一人に案内させて、勝手の分らぬ客棧に生れて初めて二人の身を托した。

四方は壁で八疊敷位のガランとした室に、木製にアンペラを敷いた寢臺が一つあるきり、かなりの寒さに火の氣もない殺風景である。今は判然と覺えてゐないが、室代何十錢、蒲團へ五分程の厚さの、小さい膝掛のやうなもの一枚何錢、炭火何錢、夕食朝食何十錢と別々に請求された。

翌日汽車で天津に赴いたが、何分無錢旅行にも等しい二人の事だから、甚だ勝手な

振舞ではあつたが、先づ當地唯一の日本寺院たる東本願寺を訪ねて一宿の無心を申込んだところ、當寺では總代の許可がないと泊めるわけには行かぬことになつてゐるが、信徒の中に親切で良く無宿者の世話をする家があるから、其處へ行つて頼めとの事に、道を教はつて其家へ押かけ泊めて貰ふことになつた。無賃宿泊もこれが生れて初めてである。

天津では市内を一巡視察したことゝ、我が駐屯軍隊を訪問し、營内の廣場で講演をしたことを記憶する。何でも同行の八木君が「俺は胸を病つたのだから十分な話が出来ぬ、依つて先きに話す」と主張し、辯舌の雄で自他共に許した男ではあるが、病後だから御尤もの次第と同情したのが私の不覺、八木君一たび壇上に立てば快辯流るゝが如く、或は笑はせ或は緊張せしめ、自由自在に捲くし立てる。傍に在つて辯舌に何の自信も有たない私は氣が氣でない。今

更ながら後番を引受けた自分の愚さと自惚とを泌々悔んだが致方がない、冷汗をかき乍ら何か少し喋つて其場は済んだが、濟まぬ氣持は今でも頭の隅に残つてゐる。

三、北京より南下

北京へ着いても早速無賃宿を求めねばならぬ。東四牌樓の西本願寺へ行つて頼むと快く「緩くり御滞在なさい」と承諾されて「ヤレ／＼有難い」と喜んだ。此所は以前日本公使館であつたが、建物そのまゝの土地を本願寺が譲受けたのださうで、境内地も頗る廣く、内部も應接間は勿論、各室共になか／＼立派なものである。(其後昭和五年善導大師一千二百五十年遠忌に際し、同志二十名と共に渡支した時にも此寺を借り受け、支那僧數十名をも招請して淨土宗の名に於て大師の追恩大法要を勤修したが、其時には諸建造物も大分古びてゐた)。北京滞在は三日間位であつたと思ふ。其

間に市内や、城壁を見物し、郊外に西太后が建てたといふ萬壽山離宮等を參觀して更に南した。

其頃早くも懷中は大分淋しくなつてゐた。汽車は勿論參等で不潔極りなした。到るところの驛々で果物、饅頭、燒鶏、饅頭等を賣りに来る。梨や落花生は何處で買つても汚くないが、其他のものは支那にあればこそ食はれるのだ。饅頭は餡入りもあり、豚肉入りもある。燒鶏は生れて六ヶ月目位の鶏の羽を毫り取り、腹を割いて臟物を取り去つた後、三寸ぐらゐの箸の様なもので門棒して大きくふくらませ、醬油で附焼にしてある。頭も足も着いてゐて頗る慘酷な形をしてゐるが、目を閉ぢて食へばなかなか美味い。

車中の乗客等は吾々異國人を見ても別段珍らし相にしてゐないが、或時二十七八歳と覺しき青年が私達の側へやつて来て「君等は東洋（日本のこと）から來たか」「何

の爲の旅行か」など尋ねたのは良いが、「山縣はもう死んだね、大隈は今何をしてゐるのか」等と然も友達でゝもあるかのやうに尋ねられたのには面喰つてしまつた。

保定で下車して宏壯な兵舎を外側から見物し、石家莊では三井洋行の出張員の宅で泊めて貰つた。若い時なればこそ、唯單に日本人同志といふだけで厄介になり、家鴨の丸煮の御馳走になつた。主人公（日本人は此人一人）の名前は忘れたが丸煮の味は今だに忘れない。

四、洛陽の一夜

鄭州で汽車を乗替へ少し西へ進むと洛陽に着いた。「日本人の家は有るか」と尋ねたが、無いとのこと。今夜ばかりは無賃宿泊を斷念して客棧に投ずるより外はない。而も其日は激しい降雨であつた。

例の一物の裝飾もない乾燥無味以上に恰も牢獄の如き一室に案内されて晩餉を命じ

た。食後宿の番頭を呼んで白馬寺詣での行程を尋ねた。白馬寺といふは西紀六七年、支那は後漢の明帝永平十年は中印度の僧、摩騰、法蘭の二人が白馬に佛像經卷を乗せて來朝したので、明帝が之等を迎へる爲に建てられた支那最初の寺である。私達は其寺へ、參詣するつもりで此處まで來たのだ。ところが番頭がいふには「先日來の降雨で道路が甚しく損じてゐて、とても行かない」と。「僅か四五里の所ではないか、馬車か何か乗物があるだらう」と詰つても、「なかなか以て乗物どころではない、泥濘へ來ながら目的を達することが出来ないことは殘念至極である。然し白馬寺の伽藍だけなれば汽車の窓から能く見られると教へられて、せめてそれを名残に參詣を諦めることにした。

この一事から想像しても今回北支進軍の我が將兵諸氏が、特に本年は七十年來の豪

雨だといふ雨期に際して、どんなにか進路を阻まれ、又難行軍されたか、窺はれやう。身には二十數貫もある重い武装をなし、股も没する道もない泥土の中を、三日も五日も不眠不休且つ絶食同様で行進又前進、遂に空前の大捷を得られたことは眞に超人的の努力に外ならぬと、吾等は唯々感激感謝の念を捧ぐるのみである。

さて番頭が「此宿に貴國の人が居ます」といふから「それは奇偶だ。此方へ呼んでくれ」といへば、暫くして支那服の三十歳位の男が遣つて来て「閣下は何れから來ましたか」と尋ねられて駭いた。閣下呼ばはりも滑稽だが、それより此男の發音が甚だ怪しいので「君は日本の何處の生れだね」と聞いてやると「新橋です」といふ。「新橋とは東京のか」ハイ然様であります、三つの歳に誰かに連れられて朝鮮に行き、大きなつたのです「こちらで何をしてゐるのか」桐の材木を買ひ込みに來てゐます。閣

下はこれから何れへお出でになりますのですか」「西安へ行きたいと思つてゐる」「いえ、それはいけません、あちらは戦争があります、危険です、お止めなさい。こんな會話を交して別れた。多分あの男は半島人だらう。尤も半島生れだとして立派な日本人には相違ないが、支那では韓國人と呼ばれてゐる。こんなことで白馬寺へも参り得ず、善導大師御教化の遺蹟たる西安へ古の長安へも行かず、翌朝車中から見ゆる白馬寺に合掌禮拜して歸路に就いた。

因に歷代帝王が都した古の洛陽は今その跡形もなく、白馬銀鞍の貴公子が往來したてふ大道も失せて、土で固めた低い屋根の家々が埃にまみれて並んでゐるに過ぎない小さな町と化してゐた。

五、漢口から上海へ

既に囊中も乏しくなり、甚だ心細くなつた私は「此邊で引返へさう」と告げたが、

體は弱くとも心臓の強い八木君は「折角來たのだ、行けるところまで行かうよ」と、二人は漢口までの乗車券を買つた。車中の事は殆んど忘れてしまつた。

漢口に着いても第一要件は無料宿泊の事だ。先づ日本總領事館を訪ひ、芳澤總領事に面會し、支那内地の佛教視察と在留邦人慰問旅行の旨を述べ、次でまさか無賃宿をと云はれず、特に便宜を與へられたいと申出たところ、日本旅館へ照會され半額の一泊參圓五拾錢に交渉して貰つた。總領事は其時「自分は先達てまで英國大使館一等書記官を勤め云云」と自己紹介をされたが、後の外務大臣閣下其人である。

漢口では駐屯軍、居留民團等を訪問し、翌日清汽船の三等客となつて一晝夜を費し上海に下つた。さて私の所持金は剩すところ十四五圓となつた。上海で一二泊すれば文なしとなる。八木君にしたところが大差あるまい。如何に強がりでも焦慮せざる

謹 賀 新 年

皇軍の武運長久を祈りつゝ、祖德顯揚のために一層奮起し、以つて精神報國の誠をいたしたき念願であります。何卒倍舊の御援助御教導の程願上します。

一月元旦

法然上人鑽仰會本部員一同

を得ない。偶々一等船客に長谷川某といふ

名古屋の服部時計店上海支店の主人が居ら

れ、デツキで何彼と話してゐた際、「上海に

お知合がなければ私の店でお泊めしませ

う」と云はれ、私は俗に「地獄で佛」とい

ふ程に嬉しく「では宜しくお願いします」と

と頼んで置いて、直に其旨八木君に報告し

た。八木君は莞爾として「良かったねー

」。お蔭で夜中、船が九江へ寄港した際に

八木君も私も名物の陶器を少しづつ購ふほ

どの勇氣が出た。

上海では二晩長谷川氏の食客となり租界

地や支那街を見物し、八木君は其處から内

地行の汽船に乗り、私は大連通ひの支那汽

船に乗った。三等船賃拾二圓かを支拂つた

後には一圓内外しか残らなかつたであら

う。息の臭い支那人と牛羂を列べた様に一

緒に並んで寝るのだ。それでも若い時であ

り、色んな話も交へられて楽しかつた。

大連へ上陸すれば其處は淨土宗の教線

で、もう安心だ。殊に豫め案内を受けてゐた新築明照寺の落慶式にも参列し、若干囃囃も頂戴して悠々營口へ歸着した。

此旅行は何でも十三日間位であつたと記憶する。唯ぐるりと、北支から中支那を一廻りしたといふだけで、何等の準備もなく豫定もつけず、血氣に任せて飛び出し、龍肥の如く各地で御迷惑をかけ誠に申譯がない。遅れながら此機會に厚く感謝の意を表します。

八木君は翌春奉天へ歸つて來たが、間もなく「シンダ スグ コイ」の電報に接し、直に駆けつけて悲しき葬送のお手傳ひをした。今も奉天寺の本堂前には等身大の石造「八木地藏尊」が錫杖をついて「不惜身命度衆生」の忍苦を續けてゐられる。

「信仰相談」欄は今月は編輯の都合上休載いたしましたが大次號よりは例の通り續けて参ります。(編輯部)

俳壇

大田 耳動子



飯田 古川八重子

蜘蛛の巣の白きがさみし冬至雲

評

鉛色か成は灰色の冬至雲が、あたかも鳥ならば時につくやうに徐ろに流れてゐる。その一角に蜘蛛の巣が懸つてそれが残光に白さを見せてゐる。息づまるやうな静かさだ。そこを良しとする。單純化せられた此の構圖は、平八郎か岳陽の創意の如く、更に嵯峨州の靜寂を加味した一幅の繪を見てゐるやうだ。

東京 鈴木白舟

溝の草みちて枯れをり月の影

評

溝に密生してゐた草が月光のもとで枯れてゐると云ふ句意。秋の夜にふさわしい靜かな景色である。溝を包む月の青さ、溝の底が浮き上つてゐるとも思はるゝ枯草、荒れ果てたあたりまで想ひが引かれる。平凡な材料も中七字の、思ひ切つた表現が補うて餘りある。

愛知 柴田長

雷の闇を破りて萩の花

評

萩の花を前に靜かに佇んでゐるとき

昏闇の空を破つて雷鳴がとゞろきわたつた、と云ふのである。僅にやさしき萩の花と雷鳴は、對照の妙を得、殊に「闇を破りて」の表現が極めて適切に靜から動へ、そして再び靜に戻る雰囲気を感じなく表はしてゐる。

廣島 戸川一水

枯葉ゆる朝の日ざしに百舌鳥来る

大阪 吉廣夏生

空曇る寒さを部屋にひとりみる

大阪 小山文二

瞼べに繋る八つ手の花すがし

同 藤田凡超

雲の流れ雨來さうなり鳥渡る

青森 高松秋水

蟬鈴とんで夕曉に汐の高まりぬ

京都 日野碩雄

晚鐘の一つ一つや風寒し

横濱 塚本秋月

眼も鼻も粉雪にまみれ子は笑ふ

大阪 豐田恭平

樽田に霜のあつさや年の暮

山口 長岡見智

夜學兒に父のラヂオを切りにつけり

新宮 奥村映水

新しき枕の高みに鳴高音

朝鮮 望江八年坊

雀たち井桁の雪に集まれる

大阪 前中杜丘

桐の葉に寒さしみ入り秋の月

新宮 竹中八洲子

眼醒しの時計のやみて秋の雨

東京 三野輪江雪

かさくんと落葉の中の蟬かな

郡山 安齋四郎

爪剪りし指頭に沁みる寒さかな

越中 龜田四三九

初霜に遠き戦を思ひるし

丹後 志賀良清

菊見人菊の障子に影ひきて

下關 關野公孫

コスモスの投げ入れられし泊り船

千葉 安田保治

風筋に光る尾花をまなかひに

大阪 橋本花汀

茶の花の白さ目にしみ且かな

禮文島 長尾月松

赤土の北見街道秋晴るゝ

小倉 益田山彦

しぐるゝや野につながれし牛の眉

津久見 石堂柑山

此の頃の此まちくらき時雨かな

東京 新田眞砂

あらけなき臘のうちの冬椿

長野 和田寸丈生

水に佇てば秋深みぬと人の云ふ

下關 中尾碩雄

風鈴がしきりに鳴りて秋の暮

大和 奥田竹陰

白濱の渚の波の白き秋

朝鮮 望江八年坊

菊香る御堂に休む白佛

大阪 豐田恭年

流れゐる雲を背に菊手入

下關 中尾碩雄

木犀の花匂ふなる雨の門

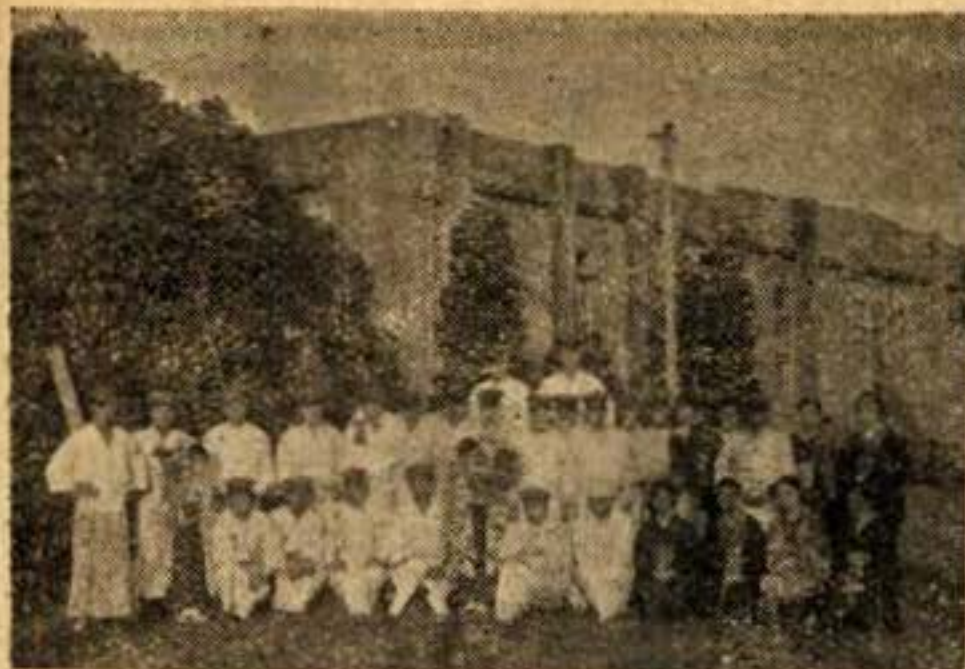
三重 岩田鈴真

長き夜のこゝろあてどもなかりけり

雙仰運動ニユ一之

本會婦人部第二回 陸軍病院慰問

南京陥落の喚聲は今や天地を壓し、全國に漲つてゐる。而し徒らに浮華のよろこびにふける時ではない。この皇軍偉業の蔭に散つ



た數多い犠牲者の爲に靜かに大往生冥福を心から祈らねばならぬと共に、傷病兵に對する重なる慰問の芳志が捧げられねばならぬ。

浄土贈呈券發行

奈良志野氏の發案

近日中に實行の豫定

本會奈良縣支部主任の志野隆則氏から、今度妙案が提出された。それは、知的な、信仰的な心の贈物として寺から信者へ、信者から信者へと、「浄土」を呈上しようと言ふ試みである。贈らうと思ふ人に、一年分なり、二年分なりの本部發行の「浄土贈呈券」を求

獨に本會本部の貞恭婦人會は陸軍第一陸軍病院を訪れて、傷病兵を慰問して非常なる歡迎を受けたが、十一月下旬更に立川の衛戍病院へ第二回の慰問を行つた。起き伏しにも苦しむ傷病兵は戰線を回顧し、故郷を夢みてどんなにか淋しく痛しい事であらう。茲に訪ふこのうるはしい信仰の婦人等の淳情を兵士らは全身にうれしく感じたに違ひない。特に輕い心の讀みもの浄土に深くうたれる所があつたと言ふ。(寫眞は當日の慰問班とよろこぶ勇士等)

めて贈り、其の券と引き換へに本部から被贈者へ直送すると言ふ案である。其の方法と體裁については考案中であるが之が發行の折は、贈物選定難は解消、信者獲得の一石二鳥と言ふ所である。

會員の聲

遊賀 淺山久次郎

浄土拾二月號本日書店より入手編輯諸先生の御覽開を目の當り見て感謝にたへません、眞野先生の御病氣は如何でせうか、早くよくなつて、再び快筆をふるはれん事を讀者一同御待ちして居ります。

龍淵遼道師の言々せまる増上寺御講演をそのまゝ紙上に御拜聴いたしたく是非々々御待ちして居ります、それを軍人會員として、國民として必ず聞いておく必要があると存じます。

中村耕樹上人の信仰相談を毎月御首待望し居ります。

浄土は創刊當時に比し、明朗性と、平易性に長足の進歩を遂げた事は事實ですが、まだ、難解のそしりをまぬがれません。

吾々の大部分は百姓であり、町人であり、かけひきにとまなき商人であり、理窟に行きづまつた科學者であり、職工であり、官吏であり、馬車引きであり、日雇労働者である事を御記憶ありたし。

そして、吾々は目に佛教につき一丁字なき者共である事を知られたい。

吾々は職業にいそがしい、そして常に心の底から眞實の生命に生きたいと望んで居ます、吾々を越えた世界へひたむきに入れる者

本會 岩井大僧正貌下

淨土宗管長職を拜辭さる

後任には郁芳大僧正

かねて御不例にて其の進退を氣づかされてゐた本會總裁淨土宗管長知恩院門跡岩井智海大僧正は、現下には今秋御病軀を押して淨土宗精神報國大法會に御出勤遊ばされ、事變下に處する國民に一大感銘を與へたが、舊臘十三日、病愈々重く其の職を御辭退遊ばされ一意御静養につとめらる事となつた。

岩井大僧正現下は福岡縣に生れ夙に布教傳道に熱血をそそがれ、かつてキリスト教傳道の音樂的効果に教へらるゝ所あり宗門諸學校の過程を終へてから東京音樂學校に入學された。

僧正の華々しい教線擴張布教の生涯は實にかうした當時に於て而も型破りな苦衷によつて裏づけられたものであつた。特に日露戦争中の從軍布教は僧正畢生の豪華であつて、今回の支

那事變銃後の精神報國大會に於ける僧正最後の獅々吼はどんなにか思ひ出深きものがあつたであらうか。

大阪府堺市の阿彌陀寺に御住

現地 陣中の喜び

淨土宗上海開教副使

中島 政策

陣中の嬉しさは慰問品の到着と手紙の受領に及ぶものはない、就中、手紙を貰つた兵達の喜びしげなる顔は、どんな畫家も、彫刻家も寫し切れないであらう、幾度となく、その光景に遇つて、實に微笑ましいそして涙ぐましい思ひをした。自分よりもはるかに、年を取り、社會的經驗も深い人達が、こゝでは全くの單純な子供となつてしまふのだ。出征の勇士を持たれる家族の方方よ、知人よ、ど

された僧正が昭和八年大本山増上寺を経て、昭和九年故山下管長現下の後をうけて淨土宗管長知恩院の門跡となられ終世其の職を全うされん事を五百萬檀信徒に歸仰されてゐたのに、今次の御退職は痛く宗門内外から惜まれてゐる。

後任は現黒谷法首郁芳隨園大僧正現下と決定された。

うか、慰問の便りをどん／＼と送つて上げて下さい、そして、その笑顔を想像して下さい。今一つの喜びは、新聞紙、酒保、そして私達の訪れである、何れを見てもカラー色の兵ばかりの中に、毛色の變つた、私達は喜ばれる、喜ばれるばかりでなく、話をすること、要求される、つまらない話でも、大喜びで聞いていたゞく、殊にそれが會遊の地の人ならば、どんなに喜ばれた事だつたらう。

のをあさつて居ます、吾々は精神的糧にうゑた者です。

吾々は淨土をもつとレベルをさげて、インテリを目標にせず、職工や百姓を目標中心にして頂きたいと思ふ、淨土俗人中心にして頂きたい。

「佛教常識」は難解です、之は解題の解題を要します、もつと活きた、自由解題を願ひたい、之は僧侶方の佛教常識です、説教材料集です。

吾々はハタと膝をうち、然りと叫ぶ解題をのぞみます。

中村辨康師の法語解説は非常に難解です、之は、佛教知識と、歴史觀念なき吾々にはなんの事かわかりません、友だちもさう云つて居ました。

信仰相談の質問レベルを再認識して下さい信仰相談で聞いて居るのが、讀者の大部分の姿です。眞野先生や、中野先生や、吉田先生の如き解題であつてほしいです。

吾々は、活きた、單純な、ひたむきに信ぜられ、よく解る、力強い宗教解題をのぞみます。

佛教常識も、もつと吾々に大切で、しかも少しもわからぬ○住生○淨土○願樂○彌陀如来○回向○本願○念佛○南無阿彌陀佛○菩提○信心○因緣○因果○見佛○八正道○緣起等を淨土宗の立場として自由に且つ活きた解題を望みます。

靜寛院宮
御事蹟

國難に殉ずる大犠牲者

靜寛院宮
奉賛會理事

桑 原 隨 旭

惜しまじな君と民との爲ならば

身は武藏野の露と消ゆとも

この御歌を残されて和宮親子内親王（後の靜寛院宮）が關東に御降嫁あらせられたのは文久元年十月廿日のことであつた。

畏れ多くも孝明天皇が扈從の重役、岩倉具視、千種有文に賜はつた勅語に

「和宮ハ一女子ノ身ヲ以テ國難ヲ匡濟スルノ用ニ供スルコトヲ得バ水火ノ中ニ投ズルモ辭セズト上答シテ之ヲ承諾セリ」

とのたまうた如く、宮は維新直前の紛亂の渦中に立たせられ、苟も至尊の血脈と生れ給ひし御身を以て、國家のために進んで難に赴かれるの一大犠牲者とならせられたのであつた。

しかも關東に御降嫁あらせられて後は、夫君徳川家茂公への御貞順、義母天璋院への御孝道によつて婦道の誠を示され、更にまた官軍の討幕なつて後は、主家徳川家を既滅の中より救ふために凡てを

犠牲とせられたのであつた。

この御方こそ、多故多難の渦中にあつて婦道、臣道、人道の三全を得、義理人情を併せ臻りたる日本女性の眞の鑑である。

今日一大時局に當面して私は、かく如き偉大なる犠牲的精神（これこそこの時局が最も必要としてゐるものである）に就て、その一挿話を語りたいと思ふのである。

主家を既滅の中に救ひ給ふ

慶應二年長州征伐の失敗は徳川幕府に致命傷を與へたと云はんより、幕府の命數の盡きたことを天下に公表する機會を與へたに過ぎなかつた。十五代將軍慶喜は早くもこれを自覺し、慶應三年十月十四日土州藩の諫告を容れて斷然大政奉還の表を奉つた。明治天皇之を嘉納し給ひ、王政復古の大號令は同十二月九日早朝を以て頒布された。維新の新政府は總裁議定參與の三職によつて忽ち組織され

た。而して慶喜はこれに興らない。大政奉還の功によつて慶喜は新政府に用ひらるべくして、排斥を受くべき表面の理由はない。然るに事のこゝに至つたのは、朝廷内に武斷的改革論者と平和的改革論者との衝突あり、武斷派が勝利を得た爲めである。慶喜は自己が新政府に用ひられないからして直に反旗を翻すやうな輕薄子ではなかつた。されど部下の不平は遂に抑壓することが出來ず、翌明治元年正月三日伏見鳥羽の戦争を惹起するに至つた。この戦争は幕軍散々の敗北となり、徳川氏は武斷派の注文通り賊名の下に官軍の征伐を受けねばならぬことゝなつた。聰明なる慶喜に取つては千載の遺憾である。

慶喜は大阪より海路江戸に歸るや、勝安芳の忠言を用ひ、二月十二日上野大慈院に謹慎恭順の意を表し、官軍來るとも無抵抗主義によつて大政奉還の初一念を貫徹することに確定した。二月中旬に至つて有栖川宮は東征大總督とならせ給ひ、東海東山北陸の三道から進軍し、三月十五日は、愈々江戸城總攻撃の段取りとなつた。これより先き徳川氏は謝罪使を三度立て、慶喜謹慎の旨を奏上し、一向官軍の御差し止めを願うたけれども、皆途中で官軍に喰ひ止められてその眞意を朝廷に達することを得ず、今や官軍の叫び聲たる「慶喜は斬るべし江戸城は屠るべし、徳川の社稷絶つべし」と云ふ大旗の下に、二百五十年來の徳川氏も風前の燈火たらんとした。この際徳川救援の道は皆杜絶されてしまつた。たゞこの時に有力なる嘆願

として朝廷を動かしたるものは靜寛院宮の御手元から朝廷への内願書のみであつた。

初め錦旗の東下以前、朝廷におかせられては、切かき宮をお呼び寄せになつた。けれども、義理の堅い宮は頑としてお聞き入れにならなかつた。

一月十二日慶喜大阪より歸城するや、直に宮の御手元より謝罪のお取り成しを請ひ奉つた。宮はもとより徳川家と運命を共にせんとの御決心であらせられたから、今や主家を既倒に救ひ出さんが爲めに雄々しくも日夜焦心苦慮を極み給はぬことゝなつた。

一月二十一日宮は上藤土御門藩を便として、備本少將の手を経て朝廷へ内願し給うた、その文に曰く、

(前略)此度の一件は兎も角も慶喜は迄重々不行届之事故、慶喜一身は如何様にも仰付られ、何卒家名立行候様幾重にも願度候後世に當家朝敵の汚名を残し候事、私方に取候ては實に残念に存じり。何卒私への御憐愍と思し召され、汚名を雪ぎ、家名相立候様、私身にかへ願上り是非官軍差向られ、御取つぶしに相成候はゞ、私事も當家滅亡を見つゝながら居候も残念に候まゝ、急度覺悟を致し候所存に候、私一命は惜不申候へ共朝敵と共に身命を捨候事は朝廷へ恐入候事と誠に心痛致し居候。心中御憐愍あらせられ、願之通り家名之處、御憐愍有らせられ候はゞ、私は無二申迄も一門家僕之者共深く

朝恩を仰候事と存じより。何卒々々御申入御願申入より。尙同役衆へも宜しく御申傳へ、御取計之事御願申入より。以上。

靜 寛 院

橋本少將殿へ

靜寛院宮の御精神の發露たる大文章は、その御手記になれる靜寛院宮日誌に汪溢して居る。何れも理至り情逼り至誠天地を動かさずんばやまない生氣に満ち／＼たものである。宮は誠心誠意の徹底者であらせられた。この御文の如きもその一である。この御文によつて橋本少將（實梁）先づ感激し、更に朝廷四周の公卿の心を動かし、就中涙を揮つて感激したのは岩倉である。岩倉は御降嫁當時の責任者であつた。彼の意見書によつて御降嫁遊ばさるゝことゝなつたと云うてもよい。然るに今の御文の如く宮は進退生死兩難の岐路に苦んでおいでになる。若し朝廷が徳川をお取り潰しに相成らば宮は徳川家と共に自害の御覺悟である。岩倉たるもの、如何に機略縱横の腹黒の政治家と雖も、この御文を見て晏然として居ることが出来よう。かくて岩倉の主唱によつて朝廷の徳川に對する態度は大に弛み、徳川方に於て謹慎恭順の角目だに立てば家名相續をお許しになることに一決した。その旨は上臈藤の持ち歸れる正親町三條實愛の口演書によつて明かである。曰く、

此度の事は實に容易ならざる儀に御座候へ共、條理明白、謝罪の道も相立候上は徳川家血食の事は厚く思召もあらせられ候や

に伺候間、右の所は宮様はじめ厚く御含みあらせられ候やう存候事。

これによつて朝廷當路の意向は粗ぼ知らるゝ、要するに謝罪の道を明確に立つるにある。宮もこの返信によつてやゝ安堵し給ふ所あつた。これより宮は一生懸命に部下の鎮撫の爲めにお骨折りになつたり、東海東山の官軍にお止まりの歎願書をお遣しになつたり、殆んど日夜を分たず御心配になつたのである。若し一麾下の者が官軍に手出しをして、謹慎恭順の實を破つたならば、最早徳川氏は永久破滅である。然るに由來關東人は率直で喧嘩好である。彼等に陰忍の謹慎は相當につらいことである。宮はこれ等の者の鎮撫の爲めに幾度か懇ろなる諭達書をお出しになり、又山王社に使を立て、鎮撫の御祈禱まであつた。諭達書の一に曰く

此度追討使差向られ候に付、末々に至る迄も、不敬之儀無之様、此程より精々仰付られ候事乍ら、猶又諭達遊ばし度思し召し候、朝廷にも謝罪の次第により、いか様にも寛大の御處置有らせられ候御様子に御伺被爲有候得共、當地多人數の内には、萬一心得違の者候て、其邊より恭順の意取失候へば、朝廷にも最早寛大の思し召し、絶させられ、徳川家も是限之由京都より御伺被爲有候間、假令忠義を存候而も、恭順之意取失候へば朝廷へ恐入思召已而不成、立たせられ候御家名も、立たせられず様に成行き候へば、實以て御殘念に思し召し候云云

世人は江戸城明渡し功勞者と云へば、直に勝西郷と呼ぶ、予も亦これに異論はない。されど彼等をして談笑の間にその功を收めしめた冥々の御力は實に靜寛院宮であらせられたことを見逃してはならぬ。この際江戸城中に靜寛院宮がましまさなかつたならば、徳川氏は源氏や足利氏や織田豊臣二氏の終りの如く、悲惨なる最後を遂げたに相違ない、然るに靜寛院宮がましましたが爲めに、朝廷先づ寛大なる方針に向はせられ、官軍は無遠慮なる攻撃を慎み、江戸の人士また宮の親族によつて無法に官軍に手出しをしなかつた、これが爲めに江戸は無事に開城が出来たのである。されば今日東京市民は江戸が灰燼とならなかつたこと（よしや大正の大震災ありたり

法然上人御歌

春

さへられぬ光もあるをお
しなべてへだて顔なるあさ
がすみかな

秋

阿彌陀佛にそむる心の色
にいでは秋の梢のたぐひ
ならまし

夏

われはたゞほとけにいつか
あふひ草こゝろのつまにか
けぬ日ぞなき

冬

雪のうちに佛の御名を唱ふ
ればつもれるつみぞやがて
きえぬる

とは云へ帝都たるを失はぬ原因はこゝにあるを。思ふにつけても靜寛院宮の御恩を忘れてはならぬ。

四月江戸開城後間もなく、靜寛院宮の御願ひの如く、徳川の家名相續許され、田安龜之助（現公爵家達）六歳を以て宗家を相續することゝなつた。江戸の速かなる解決は高所から見れば實に日本の運命を救うたものである。若しこの際朝幕長續きの戦争とならば、外國干涉へすでに佛國は幕府に味方し、英國は官軍に味方しつゝあり、これが爲めに起り、他に如何なる事變が生じたかも知れない。江戸開城後、上野戦争、會津戦争、五稜廓戦争等はあつたけれども、大局には影響することなく、明治維新の大業が迅速に進むことが出来た。これを思へば靜寛院宮の冥々の御功績は、單に江戸灰燼を免がれしめ給うたことや、徳川家をお救ひになつた許りでもなく、又實に日本の運命を救ひ給うたと申し上げべきである。これ洵に二十三歳の一女性のお力である。零を如何に割るも無限である、己れを捨てた宮の御力は實に無限大にして、所謂「一縷を以て千鈞を繋ぐ」とは宮のことを申すべきもの乎。

御上京問題

徳川家相續の一件も落着を告げたる翌五月二十七日、三條實美、樞本實梁の正副兩使は宸翰を携へて靜寛院宮の清水邸に到り、「此度特別の御仁慈を以て御寛典仰出されしに就ては、上京願ひなし給はず

や、此儀承りたし」とお勧めをした。こゝに又恐れ多い御上京問題が起きた。惟ふに主上（明治天皇）がかく御上京をお勧めになつたのは表面は御慰勞の爲めでもあり、先朝御陵參の爲めでもあり、又降嫁後初めてのお里歸りの爲めでもあつたが、裏面の理由は徳川家との御離縁をお勧めになつたのではなからうかと思はる。靜寛院宮はこれに對し、「全體の處、仁孝天皇様御廟參の御爲、且は此度之御禮言上の爲め、上京願ひ度は山々なれど、當家の轉封、龜之助の御禮上京の爲め、財政疲弊の折から、諸事節約の際であるから、今回は上京願ひ上げ兼ねる」旨を藤を以て橋本少將に内談せしめ給うた。

六月十四日更に勅命を奉じて三條右府來邸し、又御上京を勧め奉つた。宮は「芝の増上寺上野の寛永寺（兩寺共徳川家廟所）の處分は如何に定まりしぞ」とお尋ねになつた。「兩寺は多分此迄の通り、徳川家の者」と申上げた處、又一駿河（轉封先）には婦女子も急ぎ移住すべきものか」と重ねてお尋ねになつた。これに對し、「婦女子は急ぐに及びますまい」と御返答申上ぐれば、「昭徳院（家茂將軍）の御靈屋も出來上らず、又徳川家上下轉住の先を見届けざる中に上京は不本意なり、此二條の落着を見てから上京したければ、それまでは何卒猶豫されたし」と仰せになつた。どこ迄も主家の義理を重んぜさせ給ふ沈着の態度、たゞ／＼恐れ入るより外はない。

六月十一日、宮は一篇の親諭書を草し、藤以下の女官に示させ給

ふ。蓋し城内早くも宮の御上京を耳にし、これ正しく宮が徳川家を見棄て給ふのであるなど怨言を放つものがあつたと見える。人情の機微に注意深き宮は之れを御憂慮になつてこの書を草し給うたのであらう。其文に曰く、

夫れ人たるものは、匹婦匹夫と雖も、五倫の道正しく守るべき事は、衆の知る所に候。我れ苟も民の父母たる至尊の血脉と生れ、天下の政務を天子より御委任在らせられ候。武將の妻たる身にて、此の五倫の道を失ひ候へば、孝貞ともに立ち難くと心得候得共、何分不才不肖の身、素志も衆人には顯れ難く、慙愧に堪ず候。當春以來容易ならざる變動出來し、朝廷へ對し恐入候は言ふ迄もなく、昭徳院様御奉職以來容易ならざる御苦慮在らせられ候へ共、當家奸史の爲めに朝廷世上に貫徹せず、終には御旅中に御他界在らせられ、數年歳疑の慶喜へ跡式御讓に成候事、御不本意の事と考察候。尤も御當人御本意より選舉在らせられ候には之なく候得共、今日に至りては、昭徳院様御選舉、慶喜かゝる逆亂を發し、家名斷絶にも至り候はば、御先代分けて昭徳院御尊靈、如何にも御残念に思し召し候事と悲歎に堪ず、家名の處只管歎願致し、藤上京の節、歎願の書、橋本中將へ差出し候處中將より役人衆へ右の愚意申入れ置かれ候由に承り候。其後御進軍の趣傳承に付ては、一身の存亡は當家の安危に従ふべくと決心の意書、猶又中將へ差出し置候處、非理の事共不被思

や、大總督宮機御初め、藩主共へも傳達致され候様子にて、素志も貫徹し候趣傳聞候。其後慶喜謝罪謹儀の實効相立候に付、御寛大の御處置仰せ出され候事は、各承知の通りに候。右に付今度上京願候様此程勅使の節御沙汰蒙り候に付、早速上京御詔御禮申上ぐべき筈には候へども、今度龜之助轉封仰せ出され候間、龜之助殿封國へ引き移され、家臣一同の安堵を見届けず、急速上京候ては、節義も立ち難き事に候間當家の人々は勿論、天下衆人の誹謗を請け候は必定に候。左に候ては一身の恥辱は差置き、孝貞二つ乍ら相缺候様にては、春以來身命を懸ち歎願等の素志も忽ち水泡と相成り、始めありて終りなきは人たるものゝ取づる所、左り乍ら、此誠心も當地の人々へは貫徹し兼、嫌疑を受け候様子に付、誠に薄氷の上に坐する場合に付、一同深く案勞の様子諒察し、臣子の至情實以て感泣に堪へず候。就ては銘々身の上にも如何様の變事有間敷とも言ひ難く候。我一身は節義を守り、假令非命の死をなすとも、不義にして長生ならんより遙かに潔しと決心の事には候へども、銘々薄徳の主仕へ、積年の艱難を忍び、其上萬に一つも不慮の事これあり候ては、忍びざる次第、不仁不義にも當り申すべく候間、節義を捨て、速かに上京可願と一度は決定候得ども、再三再四懇懇候に人間些五十年、長壽としても百歳の生命のために、千歳までも不義の名を残し候事は、實以て殘念の事に候間、

銘々の心中を察せず、不仁不義に當り申すべくやと、其所は深く當惑候へ共、咄とせし證も無き事に恐怖し、重き孝貞の道を失ひ候事は成し難く候、尤も此誠心も名聞のために盡し候にも無く候間、茲曲の人は何共言ば言へ、かく迄誠實を盡し候上、圖らざる災もあらば、是れ天の罪する所と覺悟し、運を天に任し、此場合にての上京暫くは猶豫相願候決心に候。尤も轉封相濟候上は、速かに願出候心得に候間、暫くの處辛抱し、此愚意を體認し、邪曲の歸言聞くに忍び難き儀もこれあるべく候得共、聊かも懸念せず、心を正路に置き、誠心を守り、主従一致の誠意、天地の神明照覽を仰ぎ候様致し度候。頑愚の決心定めて衆の意に相戻るべくとも考察候得共も、惜みても惜むべきは後世の名に候間、何卒愚意を諒察し候様若輩の者共へ、厚く教諭の様願入候去り乍ら節義も相立ち一同安泰の策も候はゞ覆藏なく申出で候様致し度候事。

何と云ふ堂々たる大文章であらう。身は至尊の種と生れ將軍の御臺所とまでなつたものが、何處迄も天下臣民の模範とならないで何んとしよう。道の爲めには、火の中水の底にも辭せないと云ふ烈々の大精神實に言外に溢れて居る。死は實に最後である。この大決心であらせられたればこそ、徳川の家も、國家の危急をも救ひ給ふことが出来たのである。某の歴史家此御文章を評して唐人の出師の表、陳情表に比す、又むべなるかな。

徳川家康の軍旗

大野 法 道

永らくの戦亂の後をうけて天下を統一し、二百六十餘年の久しきにわたつて、日本の國家の泰平を持続させる基を築いたのは、いま新らしく云ふまでもなく徳川家康であるが、あれ程の大業の成就したのも、つまりは思慮ふかい沈着と果斷の性格が然らしめたのである、しかもその奥には淨土の不拔の信念が底力となつてゐたのを思ひ出すのである。

源氏の嫡系の新田義重から始まる徳川家の一門が三河に據つて偉大さを加へてきたのは足利義政の時代である。その頃、徳川信光は岩津城外に信光明寺を建て、父祖の廟所を設けたが、文明十八年七月その寺に納めた願文には、子孫永く淨土宗に歸すべきことが誓つてあるばかりでなく、子孫が武運長久で天下を領するに至らんことが希願されてゐるから、この時に既に徳川氏には天下の志があり、家康になつて漸く成果したわけである。

家康の淨土の信仰は、祖先から流れ來つたのであるが、また大樹寺の登譽上人によつて養はれたのである。大樹寺は信光の子の親忠が、文明七年に額田郡伊田野に創立したので、開山第一世は勢譽愚底上人である。親忠は平生からこの上人の教へを受け、淨土の信仰がいかに武運の伸長に力あるものであるかを知つて居り、應仁二年伊田野の戦に五百餘騎で二萬餘の敵軍と決戦して、見事に勝利を得たが、その戦死者を慰靈せんためにこの寺が建てられたのである。晩年に親忠は剃髮して西忠禪門と云ひ、ひたすら念佛に精進したのであつた。

家康の祖先にはかゝる篤信者があつたばかりでなく、殊に幼少からなめつくした辛苦、逆境の艱難から、かすしれぬ戦場に見た慘狀の経験によつて、天稟の性を一入ふかく徹到させ、淨土に不拔の信仰を持つやうになつたのである。

家康の淨土の信仰は、早くから群雄の間に知れわたつてゐたと見えて、武田信玄が部下に、

「家康、淨土の寺へ行き、知識にあひて、念佛の十念といふものを取り、疑ひを切りて……」

と語つたと傳へられてゐる。家康はこの十念といふ簡潔な行儀に含む力を感じ得てゐたので、出陣の際には大樹寺へ行つて十念を受け、又は寺の方を向いて十念を唱へたと云ふことである。

殊に痛快な事は、

「厭離穢土、欣求淨土」

の八字を書いた軍旗を立て、戰に臨んだことである。この旗についてには種々の説があつて、或は一向門徒の一揆が蜂起して、家康不利と見た登譽上人は、早速に八字を書いた旗を與へ、人々を集めて加勢したと云ひ、或は桶狭間の役に家康が大高城を退却して大樹寺に入つた時、織田勢が押しよせたのを登譽上人が此旗を獻じたのに勢ひを得て、敵を撃退したと云ひ、或はまた親忠の時に愚底上人が此旗を與へ伊田野の戰に用ひて勝つたのに倣つたのであると云ふが、いづれにせよ家康が此旗を建てたのは事實とすべきである。

この旗の言葉について、次のやうな話が傳へられてゐる。

登譽上人が家康に、

「公が戰に向はれる時は、敵に打ち勝たうと思ふ心に立たるか、

それとも敵を討ち殺さうとする心であるか」

と問ひかけた所、家康は、「それは問題にならぬ」と答へた。そこをすかさず上人は、

「敵を殺して何のためになされるか」

と詰めよつた。家康の答へは、

「城を抜いて武威を振ひ、遂に天下を取つて、富、天下を有するにある」

と、上人曰く、「富、天下を有して何の爲になされるか」

家康、

「家門を興し、地位を子孫に傳へん爲である」

上人、

「貪利の心を以て天下を有するは、たとへ一時の榮えを得るも、驟雨の日を終らざる如く永續するものではない、宜しく深く永久を思ふべきである」

とて更に、亂世を統一して天下に號令する者は仁慈寛度にして、萬民の苦難を抜き去つて泰平和樂なる國の榮えの眞の姿を出現すべきである。こゝに「厭離穢土、欣求淨土」と書いたのは、穢土を厭ひ離れ、淨土を欣び求めることで、紛然たる擾亂の苦難を滅して、萬民永存を得て悦服する國土を求むる意味であると説いたので、家康も大に感服したと云ふことである。(六八頁に續く)

勤王僧秘話

惠谷隆戒

幕末維新の京都は、洛の外を問はず、至る所に血生臭き風が吹きすさび、勤王佐幕の論喧々囂々として盡くるところを知らずと云つた有様でありました。殊に淨土宗總本山知恩院の如きは、畏くも法親王を御門主に戴いてゐるとは云ふものゝ、徳川幕府の恩顧を蒙つてゐたと云ふ關係上、倒幕激徒の注視の的となり、剩へ慶應四年正月七日、知恩院第七代門跡、尊秀法親王が御復飾遊されて華頂宮傳經親王と申し上げることゝなり、超非常時の政務に參與せられることゝなつた爲、資財の窮乏を告ぐる上に、かゝる難局に遭遇しましたので一時收拾すべからざる状態に陥つたのであります。かゝる難局に際會して、自から君臣の大義を遊説し、全國の道俗を率ゐて盡忠報國の誠を致し、維新回天の大事業を翼賛し奉つた不世出の偉人が現れたのであります。それは誰あらう、當時の知恩院住職名譽學天大僧正であります。

慶應四年正月と云へば、即ち明治元年のことでありまして、彼有名な鳥羽伏見の合戦があつた時である。幕府の軍勢は鳥羽街道の法傳寺（淨土宗の寺院）に本陣を設け、薩州藩は東寺に本據をかまへ、長州藩は大佛方廣寺を本營として鳥羽伏見の警衛にあたり、正月三日遂に戦端はきり開かれ、砲煙彈雨の中を兩軍入り亂れて逆襲進撃し、至る所に死屍累々として横はり、またゝくまに一大修羅場を演じ、遂に幕軍は敗退し、官軍が大勝したのであります。この時宗教家の活躍も亦すばらしいものであつたのであります。西本願寺の廣如上人、明如上人、徳如上人等は、全國の門末信徒を激勵し、巨額の軍資金を集めて献金し、自から門徒を率ゐて猿が辻御警衛の任に當り、尊皇近衛團を組織して禁裏の御警衛をなす等幾多の報國美談があります。これと相ひ對して知恩院の學天僧正の活躍も洵に目醒ましいものがあつたのであります。

僧正は知恩院住職に就任してから、知恩院宮尊秀法親王と協力し、攘夷祈願、天下泰平祈願等の法會を修し、華頂宮御殿に擊劍道場を設け、安藤雅樂、大八木兵庫、岩堀監物の三名を擊劍取締役となし、寺僧をして武術を練磨せしめたのでありまして、當番非番を問はず必ず出場して稽古するやう半強制的に訓練せしめてゐるのであります。又鳥羽伏見の戦争の後、戦死者の英靈を弔はんが爲に、同年の秋、戊辰殉難忠士の碑を建設せんことを發願し、金七十二兩を投じてこれを調製したのであります。碑の表には殉難忠士の墓と記し、その裏面に次の如き撰文を刻したのであります。

頃年有抗朝命二者上勅諸藩二征之殺傷甚多殉難者不可勝記一
無堪三側隱之至二因聞之官聽二修追福齋會二且樹立墓碣二以慰忠
魂一

大僧正 學 天 誌

石碑は高さ三尺八寸の掉石と、土臺一尺八寸、下臺一尺の臺石とより成り、知恩院の大鐘の東北隅に建設したのでありまして、十月二十五、六、七の三日間大殿に於て殉難忠士追福の大法要を厳修したのであります。

これより先き、同年四月二十一日、東征大總督有栖川宮熾仁親王が江戸に御入城遊され、次いで五月二日上野彰義隊を壊滅し、更に米澤、仙臺、會津などの諸藩を征伐し、東北、奥羽、北越の地は概ね平定したので、九月二十日、明治天皇の車駕は、京都を發して東

幸せられることゝなつたのであります。この東幸につきまして、輔相岩倉具視公より、東幸御用金五萬兩を勸王の趣旨により調進するやう知恩院へ通達があつたのであります。かねて盡忠報國の精神に燃えてゐる僧正は、華頂宮の御旨を受けて、特使を近畿地方の門末寺院に派遣し、勸王報國の大義を諭達し、九月五日より十五日までの僅か十日間に、河内・和泉・播磨・大和の五ヶ國から三萬三千六百四十四兩を、山城・近江・丹波・丹後・但馬の五ヶ國から二萬八千六百七十三兩を、合せて五萬兩の大金を募財して上納したのであります。この時の僧正並に特使の方々の努力は洵に言語に絶するものがありまして、到底筆舌のよく盡す所ではありませんが當時の記録は現在知恩院の寶庫に保管されてありますが、これを一覽致しますると僧正が滅私奉公の精神に立脚し、維新回天の大事業を賛し奉つた實狀が眼前に彷彿として現れて來るのであります。

僧正は短身、瘠癯でありましたが、威風堂々として眼光人を射るの感あり、居常嚴正にして禮拜誦經怠ることなく、儉素節量を重んじ、名聞利養を求めず、自から無著と號し、佛教各宗の學に精通して、德望一世に高く、日常の業務の傍ら國學の研究に意を用ひ、詩歌・文章・書道を能くし、勸王の志士と交り結び、知恩院山内に勸學場を開き、教學の興隆、學徒養成につとめ、國民精神の涵養に盡す所大なるものがありました。明治三年十一月二十六日六十七

歳を一期として大往生を遂げられました。

僧正に次いで俊光・徹定・行誠等の諸高德相次いで知恩院に住職せられ、皇室と浄土宗と關係は愈々緊密の度を加へて來たのであります。その一例を申しますれば長くも明治天皇は御即位遊ばさるゝや、先帝の御遺品として、青銅花生及び唐桑蔕繪花臺を知恩院へ御下賜あらせられ、同五年六月二日には、天皇親しく知恩院へ玉歩を印せられ、お成りの間に御休憩遊ばさるゝの光榮に浴し、又同十年一月十日には、昭憲皇太后が同じく行啓遊ばさるゝの榮譽を忝うしたのであります。尙茲に特筆すべき事は、天皇・皇后・皇太后三陛下が、孝明天皇の御十年祭の爲御西下御駐轡中、萬一非常の節は、知恩院へ御立退き相成る由の御沙汰を拜した事でありまして、洵に恐懼に堪へざる次第であります。又近くは大正二年四月一日、東宮（今上陛下）・淳宮（秩父宮）・光宮（高松宮）三殿下御入浴の時、お揃ひにて知恩院へ行啓遊ばされたのであります。この外御下賜金並に御遺愛品御下賜遊ばされたことも屢ありますし、又明治四十四年宗祖圓光大師七百年御遠忌を修する時には長くも明治天皇よりの明照大師の徽號加誼の勅書を下し給ひ、全宗門人等しく、皇恩に感泣してゐる所であり、更に大正天皇は、明照の勅額を御下賜遊ばされ、重ねて聖恩の無窮なることに感激してゐる次第であります。

（完）

（六五頁より續く）

とにかく家康は、征夷大將軍となつて天下を掌握することゝなつてからは、専ら太平なる樂土の出現に意をつくし、史上稀に見る周密な用意を以て、江戸時代の幕を切つて落したのであつた。世間では種々な批評が云はれるけれども、戰亂劍戟の後をうけて、國富の盈實と文化の建設を目ざし、約三百年の太平の世を産み出したその功績は讃歎するに充分なものがあると思ふ。

家康は浄土宗の日課念佛を誓受してゐたのであるが、性來几帳面であるだけに、日々缺かすことなく實行してゐた。晩年、駿府に退いてからは殊に六萬遍の日課をつとめたので、二代將軍秀忠の夫人崇徳院へ與へた手紙に其心境が記されてゐる。ある時、軍務に取まぎれ、臥戸に入つてから忘れてゐた事に氣が付いて、起き上つて佛間へ行つてひそかに念佛してゐると、刺客が忍び込んで、ぬけ敷の寢所へ双をつき差し、氣合ひをかけた物音に刺客は捕まり、念佛者は危害を免れたと傳へられてゐる。

一旦誓つたことを、行はずには居られない忠實さが、外から襲ひ來る一切の邪魔物をたじくにするのである。東洋平和の建設を踐躍する第三國の邪魔物は、唯この誓の一字を強行する事によつて、完全に撃退しうるであらう。

編輯後記

▽編輯を終つた日が、丁度南京陥落祝賀提灯行列の當日、上氣した身體を冷氣にうたせ乍ら戸外に出ると、火、火、火、火、蜿蜒たる炎の流れが、軍歌の高唱と萬歳の爆發に震動する全市を紅一色に色彩つて、流れ去り、流り来る。

▽日本を擧げてのこの歡喜、大轉回期を象徵するこの大火炎、記者はこの炎に渦き込まれながら萬雷の如き歡呼に唱和したのであつた。

▽新時代が来る、新時代が来る！東洋を樞軸として世界は今大きな轉回を試みんとし、世界は等しく瞳を見張つて、この大事業の成果を見守つてゐる。「勝つて胃の緒をしめよ」この合言葉は、この大歡呼の中に、我々の浮き上らうとする氣持の重心となつて、大地に引込んで行く。然り、戦ひは

これからである。

▽この新春程意義深き新春は少いであらう。新年にはいつも今年こそはと思ひながら、一年を矢張り凡々と過して仕舞ふわれわれではあるが、今年は何んとして腹をきめずにはをられないのである。餘義なくされるのであるがそれは良い意味に於て餘義なくされるのである。「がんばらう」とわれわれが云ふまでもなく、情況がわれわれに「がんばれ！」と叫ぶのである。がんばらう！

▽新年號としては出来るだけ清新の氣を溢らしたつもりである。佐藤春夫氏、吉田絃二郎氏、田中貢太郎氏の文壇の三大家が、本誌のために非常な御好意を寄せられた三氏とも御多忙の中を特に御寄稿下さつたこと對して誌上より厚く感謝いたします。

▽特輯は稍々固くなつた恨みはありますが、淨土宗と關係の深い

人々の挿話を選んで、掲載いたしました。今後はもつと平易な物語風の讀物として續けて行き度いと思つてをります。

▽代議士西岡竹次郎氏は上海皇軍慰問議員團長として、親しく戦線を視察慰問せられた方、淨光會會員としても宗門のために非常に御盡力願つてをります。御多忙の中を快く稿をお寄せ下さいました。從軍作家北林透馬氏の隨筆と相對して本誌獨特の現地報告であります。

▽今年は前にも述べたやうな意氣込みで連續ヒットを飛ばしたいと張切つてをりますから、讀者諸賢にても、編輯上の御希望があらましたら、どしどし御注文下さいまして、同人、讀者一體となつて共同編輯の實を擧げ、一大飛躍に御協力下さる様願上ます。皇軍の武運長久、銃後の守りの健實なる發展を心から祈ります。(大木)

淨土 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年十二月三十日印刷納本
昭和三年一月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

絶好の

布教用書

法語例

(一七) わが浄土をたつる心は凡夫の報土にむ(生)まるゝことをしめさんがためなり。

(二〇九) 酒飲むは罪にて候か。答。まことには飲むべくもなければ。この世のならひ。

(二二五) 子産みて神佛へまいる事百日はばかりと申候はまことにて候か。

答それらも佛法にはいま(忌)す。

(二三四) 出家は若きと老いたるといづれが功德にて候。老いては功德ばかりえ候。若きはなをめでたく候。

私たち

の今なやん

でゐる問題を法

然上人は己に八百年

の昔に悩んでおられた。

そして迷信的、偶像的宗教の

是正改革を叫んだのが祖師であ

つた。

西にルーテル東に法然と稱せらるゝ所以

である。法然上人の句々言々悉く時代への關

心が波うつてゐる。

本書整備内容 (藤井實應編)

○道を求む ○新しき救ひの道 ○本尊 ○安心 ○念佛

○生活 ○社會 ○和歌 ○法然上人の略傳

發行所

法然上人讃仰會

定價 三十三錢

送料共 クロース装
菊半截一三〇頁

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十二年十二月廿日印刷納本 昭和十三年一月一日發行

浄土第四卷 第一號

定價金十錢 (送料一錢)